

階下の一室に兀座せる篠田は、俄に起る階上の拍手に沈思の眼を開きぬ、
隙洩る雪風に燈火明滅、

十九

正午には尙ほ間のあり、

同胞新聞の樓上なる、編輯室の暖爐の邊には、四五の記者の立ちて新聞を獵ざるわ
り、椅子に凭りて手帳を翻へすあり、今日の勤務の打ち合はせやすらん、

足音わはたしく駆け込み來れる一人「諸君、——實に大變なことが出來した」
其聲は打ち顔へて、其面は色を失へり、彼は吾妻俊郎なり、

「何だ、君、そんな泥靴のまゝで」と、立ちて新聞を見居たる一人は眉を顰めぬ
「電車でも脱線したと云ふのか」

「馬鹿言つてちや困まる、我社の危急存亡に關する一大事のだ、我々は全然、篠田
の泥靴に蹂躪されたのだ——」吾妻の兩眼は血走りて見えぬ、

「ナニ、篠田様が如何なされたと云ふんだ」と、居合せる面々、異口同者に吾妻を

顧みたり、

吾妻は目を閉ぢ、齒を嚙締て、得堪えぬ悲憤を強ひて抑へつ「諸君、僕は實に諸君に
對する面目が無いです、——從來僕は篠田先生に阿媚するとか、諂諛するとかつて、

諸君の冷嘲熱罵を被つたですが、僕は只だ先生を敬慕する餘りに、左様な非難をも受
くることになつたのです、然るに諸君、僕は全く欺かれて居ました——」吾妻はハ

ンケチもて眼を蔽ひつ「僕が諸君の罵詈攻撃をさへ甘んじて敬愛尊信した彼は——諸
君、——賣節漢であつた、疑もなき間諜であつた」

「間諜ッ」と一人は吾妻を睨めり、

「馬鹿ッ」と他の一人は冷然微笑せり、

一同の吾妻の言に取り合はざるに、彼は悄然として落涙せり「ア、諸君、——僕の
言を信用なさらぬは、必竟僕が平素の不徳に依るですから、已むを得ないです、が、

先生を間諜と認められたのは、僕の観察では無い、先生とは最も密接の關係ある鍛工組合が調査の結果、昨夜の臨時總會に於て満場異存なかつた決議です——」

「ナニ、鍛工組合が決議した——吾妻、又た虚言吐いちや承知せぬぞ」

「騒いぢや可かん、——彼の松本が例の猜忌と嫉妬の狂言なんだろう、馬鹿メ」

吾妻は目を擧げて「左様です、若し松本等の主張ならば、僕も驚きは致しませぬ、然るに彼の温良なる、寧ろ溫柔の嫌ある浦和武平が、涙を揮つて之を宣言したので、餘程正確なる證據を握つて居るらしいです、昨夜は兎に角、調査委員を選で公然之を審判すると云ふことにして散會したさうですが——聞く所に依れば、先生も昨夜は眞ッ青になつて、一言の辯解も無つたさうです、僕は斯かる不祥を聴かねばならぬことを、我が耳の爲めに悲むです——」彼は面を掩ふて歎息したり、

一同瞑目せり、拱手せり、沈思せり、疑團の雲霧は漸く彼等の心胸に往來し初めけるなり、

階子に足音聞こゆ、疑ふべくもあらぬ篠田の其れなり、彼は今更此の疑雲猜霧の裡に

一歩々々静に足を進めつゝあるなり、皆な眸を扉に集めぬ、扉は開かれぬ、

篠田は入り來りぬ、

一同期せずして一歩遠ざかりつゝ、唇を結べるまゝ冷やかに目禮せり、

翌朝の都下新聞紙には左の如き同一の記事を掲げられぬ、何人が通信したりけん、

●社會黨と露犬 同胞新聞主筆篠田長二が、外に清貧を假装しつゝ、内實奢侈放

逸に耽れることは其筋に於て注意する所なりしが、鍛工組合に於ても内々調査したりし結果、一昨夜を以て臨會總會を開き、彼に露探の嫌疑充分なりとの故を以て審

判委員五名を選定せり

「机の塵」隣の噂」など云へる戯文欄に於て揶揄、冷評を加へしも少からず、「基督教徒の非國家的思想」テフ大標題を掲げて、基督教は賣國教なる所以を痛論せる佛教主義の新聞もあり、

二十

山木剛造の玄關には二輛の腕車、其の轆を揃へて、主人を待ちつゝあり、化粧室なる大玻璃鏡の前には、今しも梅子の衣紋正して立ち出でんとするを、其の後姿仰ぎてありし老婆の聲濕ませつ『では、お嬢様、何でも行つしやるので御座いますか——斯様こと申したらば、老人の愚痴とお笑ひ遊ばすかも知れませぬが、何となく今日に限つて胸騒ぎが致しましてネ——』
梅子は玻璃鏡に映れる老婆の影をながめて微笑しつ『婆や、私だつて、今日此頃外へ出るなど少しも好みはしませんかネ、折角母様がお誘ひ下ださるのだから、御伴するんです——けれど、婆や、別に心配なこと無いじやないかネ』

『いゝえ、お嬢様、上野淺草へ行しやるのを、心配とも何とも思ひは致しませんか——歸途に大洞様の橋場の御別荘へ、お寄りなされると仰しやるじや御座いませんか』

『左様よ』

『サ、それが、お嬢様、何となく心懸りなので御座います』

『何故——婆や』

老婆は垂頭て語なし、良久ありて『近頃、奥様の御容子が、何分不審なので御座いますよ、先日旦那様が御歸京になりました晩、伊藤侯が圖らずも媒酌人に爲つて下ださるからとのお話で、大勳位の御媒酌なんて有難いことは無いと、奥様も大層な御歡喜で在しつたで御座いませう、其れをお嬢様、貴嬢がキツパリ御断になつたもんですから……御兩所の彼の御立腹は如何で御座いました、旦那様は随分他人には酷くお衝りになりましたも、貴嬢ばかりには一目置いて居したのが、彼の晩の御劍幕たら何事で御座います、父子の縁も今夜限だと大きな聲をなすつて、今にも貴嬢を打擲なさるか』

と、お側に居る私さへ身が慄ひました——それに奥様の悪態を御覽遊ばせ、恩知らずの、人非人の、何の角のと、兎ても口にされる譯のものでは御座いませぬ、私でさへ彼の唇を引ッ裂いてあげたい程に思ひましたもの、貴嬢能く御辛抱なされました——
 其れがマア、不審では御座いませぬか、一週間経つや経たずに、貴嬢をお連れなすつての宮寺詣り——貴嬢をお連れ遊ばして奥様の御遊山は、私初めてお見受け申すので御座いますよ、是れはお嬢様、上野淺草は託で、大洞様の御別荘が目的に相違御座いませぬ、今夜の橋場が、私、誠に心懸りで——何やら永い訣別にでもなる様な気が致しまして——」

梅子はヂツと瞑目してありしが「婆や、其れ程迄に思つてお呉れのお前の親切は、私、嬉しいとも忝ないとも言葉には盡くされないの、けれど私、何も今日死に行く」と云ふじやなし」

聊か躊躇せる梅子は、思ひ返へしてホ、と打ち笑み「そりや、婆や、お前が日常言ふ

通り、老少不常なんだから、何時如何ことが起るまいとも知れないが、然かし左様心配した日には、家の中にも居られなからうじやないかネ、——多分遅くなろうと思ふから婆や、何卒先きに寝てお呉れよ、寒いからネ」

老婆は歔歔して言語なし、
 開きかゝりてありし襖の間より下女の丸き赭面現はれて「お嬢様、奥様が玄關で御待ち兼ねで御座んす」

「ア、左様でせうネ」と急ぎ行かんとする梅子の袂に、老婆は縋りつ、「——お嬢様、——お慎、深い貴嬢へ、申すもクドいよう御座いますか——何卒お氣を着けなすつて下さいまし——御待ち申して居りますよ——」

仰ぎたる老婆の面は、滲々たる涙の雨に濡れぬ、
 軽く首肯さたる梅子も、絹巾に眼を掩いぬ、

二輛の腕車は勇ましく走せ去れり、

二十一の

上野なる東照宮の境内を遠近話しながら歩を移す山木のお加女と梅子、

「ネ、梅子、左様でせう、だから餘ッ程考へなけりやなりませんよ、何時までも花の盛で居るわけにはならないからネ、お前さんなども、何かと言へば、最早見頃を過ぎた齡ですよ、まア、縹緞が可いから一ツや二ツ隠くしても居れようがネ——私にし

てからが、只だお前さんの行末を思へばこそ、斯してウルさく勤めるんだアね、悪く取られて、たまつたもんじやありませんよ」

「阿母さん、勿體ない、悪く取るなんてことあるものですか」
「けれど言ふことを聽いてお呉れでなきや、悪く取つておいでとしか思はれませんよ」

樹間隠れに見ゆる若き夫婦の盛装せるが、睦まじげに語らい行く影を、ツク／＼とお

加女は見送りながら「梅子、あれを御覽なさい、まアほんとに可愛らしい、雛人形の様だよ——私も早くお前さんの彼した容子を見たいと、其ればつかりが、親の樂だアね、大きな娘を何時までも一人で置いては、世間體も悪るし、第一草葉の蔭のお前の實母さんに對して、私が顔向けなりませんよ——まア御覽なネ、あの手を引き合つて、嬉しそらに笑つて、——男でも女でも彼が一生の極樂世界と云ふもんですよ——美ましいとは思ひませんかネ」

デロリと、お加女は横目に見やれり、
梅子は他方を眺めつゝあり、

「あゝ、恐ろしいお嬢様なこと——」お加女は目に角立て、獨言しぬ、
二人は無言のまゝ、長き鋪石を、大鳥居の方に出来たり、去れど其處には二輛の腕車を置き棄てたるまゝ、何處行きけん、車夫の影だも見へず、

「何したつてんだねエ——日がモウ入りかけてるのに、仕様があつたもんじやな

い、チヨツ』と、お加女は打ち腹立て、的もなく當り散らしつゝあり、通りかゝれる職人體の三人連、

『イヨウ、素敵な別嬪が立つてるじやねエか——池の端なら、辨天様の御散歩かと拜まれる所なんだ』

『束髪で、眼鏡で、大分西洋がつたハイカラ式の辨天様だ、海老茶袴を穿いてねい所が有難い』

『見ねイ、辨天様の御側に三途川原の婆さんも御座るせ』

『何れ一度は御厄介になりますすが聞いて呆されらア、ハ、、、ハ、、、ハ、、、』

お加女は顔を翳めつ『車夫は何處へ行つて仕舞つたろう』

日は既に森蔭に落ちたる博物館前を、大きな書籍の包、小脇に抱へて此方に来れるは、まがうべくもわらぬ篠田長二なり、図書館よりの歸途にやわらん、梅子は遙に其れと見るより、サと面を赧らめつ、

折柄竹の臺の方より額の汗拭ひも敢へず、飛ぶが如くに走せ來れる二人の車夫を、お加女はガミ〜と頭から罵りつ、ヤヲら車に乗り移りしが、宛も其前に來れる篠田は、梅子と相見て慇懃に黙禮し、又たスタ〜と歩み去る、

『梅子、早くおしなネ』と言ひつゝ、お加女のチヨイと振り向く時、篠田の横顔、其目に入りしにぞ、『悪黨ツ』と口の裡にツブやさつ、恍然立てる梅子を、思ふさまグイと睨み付けぬ、

二十一の二

都會の紅塵を離れ、隅田の清流に枕める橋場の里、數寄を凝らせる大洞利八か別荘の奥二階、春寒さ河風を金屏に遮り、銀燭の華光燦爛たる一室に、火爐を擁して端坐せるは、山木梅子の母子なりけり、

珍客接待の役相勤むるは大洞の妻のお熊、黒く染めたる頭髮を脂滴るばかりに結びつ『加女さん、今年のように寒じますと、老婆の難澁ですよ、お互様にネ——梅子さ

んの時代が女性の花と云ふもんですねエ——』

『でも姉さんは一寸も御變なさいませんが、私ッたら、カラ最早仕舞が無いんですよ、芳子などに終始笑はれますの——何時の間に斯う年取つたかと、ほんとに驚いて仕舞いますの』とお加女は目を細くして強いて笑ひつ、

『お客來の所へ参りまして、伯母さん、飛んだお邪魔致しましてネ』と梅子の氣兼ねするに『ほんとにねエ』とお加女も相和す、

『何の、貴女』と、お熊は制しつ『日常來つしやるお客様で、家内同様の方なんですから、氣兼ね何もありませんよ、山木の御家内なら、寧ろ同席に御馳走になろうつて仰しやるんですよ、梅子さん、磊落な方ですから、何卒御遠慮なく』カラ——と打ち笑ふ男の聲聞えて、主人の利入と物語りつ、階子上り來るは、今しもお熊の噂せる其人なるべし、

襖手荒らに開かれて現はれたる一丈夫、其の衣の身に合はず見ゆるは、大洞のをや假

り着せるならん、既に稍々酒氣を帯びたる面を燈火に照らしつ、立ちたるまゝに『やア、山木の内君——新年先づ御目出たう』

『まア、何殿かと思ひましたら、貴所ですか——姉さん、酷いことねエ、知らして下ださらぬもんですから、飛んだ失禮致したじや御座んせんか』とお加女はホ、と笑傾け『あら、私としたことが、御挨拶も致しませんで——どうも舊年中は一方ならぬ御世話様に預りまして、何卒相變りませす』

『イヤ、左様固く出られると大に閉口する——お互様ぢや』と、客は無頓着に打ち笑ひ『知らぬ方でもないの、御邪魔に來ました』

『さア、何卒是れへ』とお加女が席をいざりて上座を譲らんとするを『ヤ、床の置物は御免蒙むらう』と、客は却て梅子の座側に近づかんとす、

お熊も興がりて『其の方が可御座んす、どうせ、貴所は家内の人も同様で在つしやるんですから』と言ふを『成程、其れが西洋式でがすかナ』と利入も笑ふ、

梅子の左側に客はドツかと座に就きぬ『令嬢失禮致します』
梅子は只だ慇懃に黙禮せるのみ、

『ヲ、梅子』とお加女は顧み『お前さんは未だお初つに御目に懸るんでしたネ、
此方が阿父の一方ならぬ御厚情に預る、海軍の松島様で——御不禮無様な御挨拶
を』

借はと梅子の胸轟くを、松島は先づ口を開きつ『我輩が松島と云ふ無骨漢です——御
芳名は兼ねて承知致し居ります』

去れど梅子は只だ重ねて黙禮せるのみ、

如才なき大洞は下婢が運べる盃取つて松島に差しつ『じや、貴所からお始め下さい』

『梅子、お酌を』と、お加女は促がしつ、

二十一の三

『御酌を』と促がされたる梅子は、俯ぎたるまゝ、微動だにせず、

再び促がされても、依然たり、

『何したんだねエ、此の女は』と、お加女の耐へず聲荒らゝくるを、お熊はヲホ、
と徳利取り上げ

『なにネ、若い方は兎角耻づかしいもんですよ、まア其の間が人も花ですからねエ
——松島さん、たまには、老婆さんのお酌もお珍らしくて可う御座んせう』

『老女の方が實は怖いサ』と、松島の呵々大笑して盃を擧ぐるを、『まア、お
口のお悪いことねエ』とお熊も笑ひつ『何卒松島さんお盃はお隣へ——』

『左様ですか、——然かし失禮の様ですナ』と、美しき梅子の横顔、シケ〜見入
りつ『では、山木の令嬢』と小盃をば梅子に差し付けぬ、

『梅ちゃん、松島さんのお盃ですよ』と徳利差し出して、お熊の促がすを、梅子
は手を膝に置きたるまゝ、目を上げて見んとだにせず、

『梅子、頂戴しないのかね』と、お加女は目に角立てぬ、『こう云ふ不調法もので

御座いましてネ、誠に御不禮ばかり致しまして』

『なにネ、お加女さん、御婚禮前は誰でも斯うなんですよ』と、お熊はバツを合はして『じゃア梅ちゃんの名代に、松島さん、私が頂戴致しませう』

『こりや綺麗な花嫁が出来ましたわい』と利八は大爆笑、

『あら、旦那、何ですネエ』と、お熊は手を揚げて、叩くまねしつ『是れでも驚かされた春もあつたんですよ』グツと飲み干してハツハと笑ふ、
何れも相和して笑ひどよめく、

梅子の眉ビクリ動きつ、帯の間より時計出して、ソと見やるを、お熊は早くも見とめて『梅ちゃん、タマに来て下だすつたんだから、何卒寛裕して下ださいナ、其れに御遠方なんだから、此の寒い夜中にお歸りなさるわけにはなりませんよ、最早、其の心算にして置いたのですから、一泊りなすつてネ——ねエ、お加女さん、可いでせう』
『ハア、遅くなつたら泊りますからッて、申しては來ましたがネ』

『ぢや、大丈夫ですよ』と、早くもお熊は酒が言はする上機嫌『暫く振りで梅ちゃんのを琴を聴かせて頂させよう——松島さん、梅ちゃんは西洋のもお上手で在つしやいますかネ、お琴が又た一ときは在つしやるんですよ』

『左様ですか、——是非拜聴致しませう』と松島は盃を片手に梅子に見とる、ばかり、

酒次第に廻りて、席漸く濫る、

『旦那』と小聲に下婢の呼ぶに、大洞は暫ばしとばかり退かり出でぬ、

お熊の目くばせに、お加女も何やら用事ありげに立ち去りぬ、
お熊は松島の側近く膝を進めつ『ほんとにねエ、そうして御兩人並んで在つしやると、如何に御似合ひ遊ばすか知れませんよ——梅ちゃん、貴嬢も嬉しくて居つしやいませう』と、酔顔斜めに梅子を窺ひ、徳利取り上げて松島に酌がんとせしが『あら、冷へて仕舞つたんですよ』と、ニヤリ松島と顔見合はせ、其儘スイと立つて行きぬ、

微動だもせず正座し居たる梅子、今まお熊さへ出て行くと思ふより、直に立つて後を追はんとするを、松島、忽如猿臂を伸ばして袂を捉へつ『梅子さん』

『何遊ばすッ』振り回りたる梅子の面は憤怒の色に燃へぬ、

グイと引きたる男の力に、梅子の袂ビリ、破れつ、

二十一の四

『何あそばすッ』

と再び振り向く梅子を、力まかせに松島は引き据えつ、憤怒の色、眉宇に閃めさしが忽にして強て面を和らげ、

『梅子さん、貴嬢、餘り残酷ではありませぬか、成程今夜の始末、定めて御立腹でもありませうが、少しは御推察をも願ひたい——私の切情は、梅子さん、疾く御諒承下ださるでせう、貴嬢は私を御存知ありますまいが、私は能く貴嬢を存じて居ります——私は前年先妻を亡なつた時、最早や終生獨身と覺悟致しました、——梅子さん、

假にも帝國軍人たるものが、其の決心を打ち忘れて、斯かる痴態を演ずると云ふ、男子が衷情の苦痛を、貴嬢は御了解下ださるぬですか』

松島は梅子の袂をシカと握れるまゝ、ジツと其面ながめ遣り『斯く御婦人に對して御無禮を働きまするも——幾度も拒絶されたる貴嬢に對して、耻辱を忍で御面會致すと言ふも、人傳にては何分にも靴を隔て、痒を搔くの憾に堪へぬからです、今日に至ては、強て貴嬢の御承諾を得たいと云ふのが私の希望では御座いませぬ、只だ貴嬢の御口から直接に斷念せよと仰しやつて下ださるならば、私は其を以て善知識の引導と嬉しく拜聴致します、不肖ながら帝國軍人です、匹夫野人の如く飽くまで纏綿つて貴嬢を苦め申す如き卑怯の舉動は、誓つて致しませぬ、何卒、梅子さん、只だ一言判然仰しやつて下ださう』

梅子はワナなく身を耐へて瞑目す、

松島は一きは聲ひそめつ、『梅子さん、今に至て考へて見れば、我ながら餘りの愚蒙と

輕忽とに呆れるばかりです、私は初め山木君——貴嬢の父上の御承諾を得ました時、既に貴嬢の御承諾を得たるが如く心得、歡喜の餘り、親友知己等へも吹聴したので、御笑ひ下ださるな、戀は大人をも小兒にする魔術です、——去れば今日、貴嬢から拒絶されたと云ふことが知れ渡つたものですから、同僚などから殆ど毎日の如く冷笑される、何時結婚式を擧げるなど抑捺はれる其度に、私は穴にも入りたい様に感じまするので、寧ろ自殺して此の痛苦から逃れようかなど考へることもあります併かし是れ一に私の罪なので、誰を怨むる筈も無く、親の権力が其子の意思を支配し得ると云ふ野蠻思想から、輕忽に狂喜した我が愚を慚愧する外はありませぬ——併かし其の爲に貴嬢の御名をも汚すが如き結果になりましたは、何分我心の不安に堪へませぬので、——海軍々人は爾く婦人を侮辱するものと言はれては、是れ實に私一人の耻辱のみでは無いのでありますから、今晚は此の罪をも謹で貴嬢の前に懺悔し、赦したと云ふ一言の御言葉を得たいと思ふので御座いまする——』

瞑目せる梅子の心中には、今日しも上野公園にて、圖らずも邂逅せる篠田の面影明々と見ゆるなり、再昨年さいさくねんの春はるの夜よ始めて聽きたる彼の説教は、朗々と響くなり、彼を思ふて人知れず絞れる生命の涙、身も魂も捧げて彼を愛すと誓へる神前の祈禱、嬉しき心、辛き思、千萬無量の感慨は胸臆三寸の間に溢れて、父なる神の御聲、天に在ます亡母の幻ありくと見えつ、聞えつ、何故斯かる汚穢の筵に座して、狼の甘き誘惑に耳を假すやと叱かり給ふ、

松島は膝を正して手を拱けり、『何卒我が過去の罪は梅子さん、お赦し下下さい』

梅子は面を揚げぬ『松島さん、貴所は必ず女性の貞節を重んじて下下さいませう子』

松島は訝しげに梅子を見ぬ『——其れは勿論です——』

『松島さん、感謝致します——私には既に誓つた良人があるので御座いますから——』

梅子の頬は珊瑚の如く紅く輝きぬ、

二十二の五

「何ですッ」松島の血相は忽ち變はれり「良人があると」

「ハイ」梅子も嚴然として松島を睨み返へせり、

「フム其りや始めて承はる」と、松島は満面輕蔑の氣を溢らしつ「何時結婚なされ

た」

「否、結婚は致しませぬ」

「然らば、何時約束なされた」

「約束も致しませぬ、」

「然らば御尋ね致すが、御両親も承諾されたのか」

梅子はホ、笑みぬ「親の權力も子の意思に關涉することの出来ないのは、貴所、只今御説明なされたでは御座いませぬか」

グツト詰まりし松島は、ヤガて冷笑一番「ウム婦人の口から野合を自白するんだナ」

「何を仰しやる——」

梅子のキツとなるを、松島笑て受け流がし、

「左様だらう、未だ結婚もしない、公然約束もしない、父母の承諾を得たでもない

其れで良人があるとすれば、野合の外なかるう」

「——貴所は愛の自由と神聖とお認めになりませぬか」

「神聖も糞もゐるか」

梅子の柳眉は逆立てり「軍人の思想は其種に卑劣なものですか」

「何ッ」松島は猛獅の如く躍り上りつ、梅子の胸を捉へて仰けに倒せり「女と思つ

て赦して置けば増長しやがつて——貴様の此の榮耀を盡くすことの出来るのは誰のお

蔭だ、貴様等を今日乞食にしやうと、餓死させよう、我が方寸にあることを知らない

か——軍人の卑劣とは聞き棄てならぬ一言だ——貴様の大事な篠田の受賣たらう、見

とれ、篠田の奴も決して安穩に許るしは置かぬぞ、貴様等の爲めに帝國軍人の名譽

を毀けてなるものか』

力を極めて押し付くるを、梅子は絶へなんばかりの聲振り絞りつ、『人道の敵ッ』
黒髪バラリと振り掛かれる、蒼き面に血走る双眼、日の如く輝き、怒に震ふ朱唇白く
なるまで噛みめたる梅子の、心決めて見上たる美しさ、只凄さばかり、
炎々たる情火に松島は、氣狂い、心悶へて眼さへに眩くなれり、

『復讐——』

今や心狂ひたる軍人の鐵腕に擁せられたる、纖細なる梅子の身は、鷹爪に捉らはれた
る雛雀とも言はんか、假令聲を限りに叫べばとて何處より、援助來らん、一點の汚塵だ
け留めたるな、一輪の白梅、あはれ半夜の狂風に空しく泥土に委すらんか、
押へられたる儘、梅子は瞬きもせで睨み詰めたり、
松島は梅子を引き起しつ、其の纖弱き双腕をばあはれ背後に捉へんぐる刹那、梅子
の手は電火の如く閃けり、

『キヤッ』と一聲、松島の大なる軀はドウと倒れぬ、

襖を隔て、窺ひ居たるお熊は、尋常ならぬ物音に走せ出でぬ、
看よ、松島はヒシと左眼を押へて悶絶す、手を漏れて流血淋漓たり、
梅子はスツクと立ち上れり、其の右手には汚血を握りつ、

『来て下ださ』

絶叫したるまゝ、お熊は倒れぬ、
何事やらんと駆け上がりたる大洞も、お加女も、流る、血潮に驚きて、只だ梅子の面
を見つめしのみ、

梅子は始めて唇を開きぬ『警察へ引き渡して頂させう——私は血を流した罪人です』
死力を籠めたる細き拇指に、左眼扶られたる松島は、痛に堪へ得ぬ面、僅に擡げつ

『秘密——秘密に——名譽に關はる——早く醫者を、内密に——』

『名譽ッ？』梅子は突つ立てるまゝ、松島を睨めり、『名譽とは何事です、誰の名譽に關はるのです、殺人と掠奪を稼業にする汝等に、何で人間の名譽がありませうか、女性全體の權利と安寧との爲めに、必ず之を公にして、社會の制裁力を試験せねばなりません』

梅子の視線はお加女の面上に轉せり『繼母、貴女は嘸ぞ御不満足で御座いませう、貴女の女は、世にも恐ろしき流血の重罪を犯しました、けれど繼母、貴女のお望の破壊の大惡よりは、輕う御座いますよ——』
彼女の眼光は電火の如く大洞の顔を射れり『處女の神聖を潰がさん爲めに準備せられた此の建物が、野獸の汚血に塗れたのは、定めて殘念なことせう——傷けるもの、爲めには醫師を御招きなさい、けれど、犯罪者の爲めに、何故早く警官をお呼びなさらぬ』

大洞は、色を失つて戦慄するお加女の耳に近きつ、『少こし氣を静めさして今夜の中に密と歸へすが可からう——世間に洩れては大變だ』

ヒユウ／＼と枝を鳴らせる寒風も、今は收まりて、電燈の光寂しき芝山内の眞夜中を山木剛造の玄關には、何處に行かんとするらん、一子剛一の今更自轉車に點火せんとしつゝあり、
側には一人、彼の老婆の身を縮めて『剛様、今夜は又た一ときは寒う御座んすから何卒、御氣を着け遊ばしてネ——貴郎が行つて下ださるので、如何程安心で御座いませう』

『婆や、一飛びた——何せよ、場所が場所だからナ、僕ア心配で堪まらぬのだ、大洞の伯父だの伯母だのツて、婆や、人間の面してる畜生なんだ、姉さんの身上に萬一のことでもあつて御覽、何の顔して人に逢はれるか』
早や彼は車を運びて、門の方へ進み行く、

此時忽ち軋軋たる車聲、萬籟死せる深夜の寂寞を驚かして、山木の門前に停まれり、剛一は足をとめてキツとなれり、

小門、外より押されて数名の黑影は庭内に顯はれね、先きなるは母のお加女なり、中に擁されたるは姉の梅子なり、他は大洞よりの附け人にやあらん、

『姉さんですか』剛一は自轉車を投じて走せ寄れり、

梅子はヒシと抱き着きぬ『剛さん——』

彼女は弟の温き胸に頭をよせて、呼吸も絶へなんばかり、

剛一は緊と抱きて聲勵ましつ『凍乎なさい——』

老婆は只だ涙なり、『——お嬢さま——』

二五二

寢床の上につき直りたる梅子の枕頭には、校服のまゝなる剛一の慰顔なる、

『ナニ、姉さん、左様氣をいら立てずと、最少し休んで在つしやる方が可いですよ』

『けれどネ、剛さん、彼様猛悪な心が、此の胸に潜んで居るのかと思ふと、自分ながら恐ろしくて堪りませんもの、——私は剛さん、奇麗に死ぬことと覺悟して居たんです、彼様亂暴しようとは、夢にも思やしませんよ、如何した突嗟の心の變化か、考へて見ても解らないの、矢ッ張り私の心が、怨と怒に満たされて居たので、其れで彼した卑怯な舉動に出たのですねエ——今朝からネ、一人で聖書を読んだり、お祈したりして居たんですよ、私もう——怖くて——神様の御前へ出られないんですもの——』

梅子は身を顛はして面を掩へり、

剛一も目を閉ぢて暫ばし言葉なかりしが、『——姉さん、篠田さんも其ことを心配してましたよ』

『エ』と梅子は頭を擡げつ『貴郎、篠田さんにお逢いになつて——』其顔は赧くなれり、

『ハア、折角の日曜も姉さんの行つしやらぬ教會で、長谷川の寢言など聞くのは馬

鹿らしいから、今朝篠田様を訪問したのです、——非常に憤慨してましたよ』

『私の舉動をでせう』

『左様じやないです』と剛一は頭を掉りつ『假令世界を擧げても、處女の貞操と交換することの出来ない眞理が解らぬかつて、憤慨して居られました、何でも彼の翌日と云ふものは、警察の手を以て彼のことの新聞へ出ない様に、百方奔走をしたんだそうです、日本軍隊の威信と名譽に關はるからと云ふんでネ——實に怪しからんじやありませんか、今の社會が言ふ所の威信とか名譽とか言ふのは何を指すのです、僕は此の根本を誤つてる威信論や名譽論を破壊し盡さぬ間は、到底道義人情の精粹を發揮することは出来ぬと思ふです』

『ア、剛さん、——世間からは毒婦と恐れられ、神様からは悪魔と賤しめられて忌な生涯を終らねばならんでせうか——私此の右手を切つて棄てたい様だワ——』
『姉さん』と剛一は膝を進めぬ『篠田さんの心配して居なされたのは其處なんです』

貴嬢の一生の危機は、先夜の危難の際では無く、虎口を脱れなすつた今日に在ると仰しやるんです、——姉さん、貴嬢は今始めて凡ての束縛から逃れて、全く自由を得なすつたのです、親の権力からも、世間の毀譽褒貶からも、又た神の慈愛からさへも自由になられたのである、今は貴嬢が眞正に貴嬢の一心を以て、永遠の進退を定めなされるべき時機である、——愛の子か、咀の子か——けれど君の姉さんが此際、撰擇の道を過つ如き、弱く愚なる人で無いことは確に信ずると篠田さんは言ふてましたよ、——姉さん篠田さんは貴嬢を斯くまで篤く信じて居なさいますよ』
梅子は枕に倒れて、咽び入りぬ、『神様——何卒——お赦し下さいまし——』

二十三の一

ハイ——と警むる御者の掛聲勇ましく、今しも一輛の馬車は、揚々として霞門より比日谷公園へぞ入り来る、ドツかと反り返へりたる車上の主公は、年齒疾くに六十を越へたれども、威風堂々として尙ほ鞍に據つて願盼するの勇を示す、三十餘年以前は西

國の一匹夫、今は國家の元老として九重雲深き邊にも、信任淺からぬ侯爵何某の將軍なりとか、

陪乘したるは清洒なる當世風の年少紳士、木立の間に逍遙する一個の人影を認むるや指しつゝ、聲をヒソめ「閣下、彼處を革命が歩るいて居りませう」

「ナニ、革命」侯爵は身を起して彼方を睨みつ「あの筒袖着た壯士の様な男か」

「バ、閣下、彼が先刻も談柄に上りましたる、社會黨の篠田と申す男で御座りまする」

「フム、松島の一眼を失つたのも、彼の男の爲めか」

「ハ、尤も松島の負傷に就ては、少くも事情もある様に御座りませうが」

「イヤ、例如何なる事情があるうとも、此の軍國多事の際、有爲の將校に重傷を負はしむると云ふは容赦ならぬ」と、言ひつゝ、將軍は斜に篠田の後影を睨みつ、「何して居る、何れ善からぬ目算致して居るのであらう」

「ハ、多分今晚演説の腹案でも致し居るものと思はれまする」

「ナニ、演説——何處で」

「ハ、神田の青年會館と申すで、非戦論の演説會を」

「怪しからんこと」と將軍の眉は動けり「戦争のことは上御一人の御意に待つて

とで、民間の壯士などが彼此申すは不敬極まる、何故内務大臣は之を禁じない——ナ

ニ——だから貴様等は不可と言ふのだ、法律などに拘泥して大事が出来るか、俺など

皆な國禁を犯して維新の大業を成したものだ、早速電話で言ふて遣れ、俺の命令だと

言ふて——轡轂の下をも彈らず不埒な奴等だ」

將軍は昂然たり、

若紳士は唯々として頭を垂れぬ、

馬車は夕陽を浴びつゝ迂廻して、やがて悠々華族會館の門を入りぬ、

神田美土代町なる青年會館の門前には、黒山の如き群集の喧々囂々たるを見る、

「何故入場を許さない」集會の自由を如何にする「壓制政府」「警察の干渉」「僕は社會主義に反對のだから入て呉れい」「ヒヤ」「ノウ」「馬鹿野郎」「ワハ、」「ワアイ」

星影まばらに風寒き所、歴しつ歴されつ動搖するさま、怒濤の闇夜寄せつ碎けつするに異ならず、

鐵門は既に固く鎖されたり、只だ赤煉瓦の塀に、高く掲げられたる大巾の白布に、墨痕鮮明なる「社會主義大演說會」の數文字のみ、燈臺の如く仰がれぬ、

幾十となき警官の提灯は、吠へたける人濤の間に浮きつ沈みつして、之を制止する聲却て難船者の救助を求むる叫喚の如くぞ響く「最早立錐の地が無いのだ」「コラ、垣を越へては不可」「歴すなく」「提灯が潰れるワ」「痛い」「ヤア」
同じく入場し得ざる爲め、少しく隔たりて觀居たる數名、

「日本も偉いことになつて参りましたナ、此の戦争熱の最中で、非戦論の演説を行ろうツてんですから」

「左様、其れを又た聴きたいんで、此の騒なんですからナ」

「而かも貴所、十錢傍聴料を拂ふんだから、驚くじやありませんか」

「正直な所、誰でも戦争など有難いもんじやありませんのサ、——大きな聲じや言はれませんがネ」

立錐の地なしと門前の警官が、絶叫したるも宜なりけり、左しもに廣き青年會館の演說場も、只だ人を以て埋めたるばかり、爛々たる電燈も呼吸の爲めに曇りて見へぬ、

一見、其異に驚くは警官の嚴重に排置せられしことなり、
演壇の右側には一警視の劔を杖きて、辯士の横顔穴も穿けよと睨みつゝあり、三名の巡査は俯して速記に忙殺せらる、

今ま演壇には、春廣の洋服ヤ、垢つけるを一着なしたる青年が、手を振り聲を張上げて騒々擾々たる聴衆と闘ひつゝあり、行徳、坂井、松下、菱川、柴等の面々は皆な既に演じ終りたるなりと云ふ、否な、何れも五分十分にて中止を命ぜられしなりと云ふ特に最も滑稽なりしは、菱川が登壇開口「戦争で第一に金儲するのは誰だか、諸君、知つてますか」の一語未だ終らざるに、早くも「中止」の一喝に逢ひしことなりとぞ、是れには二階の左側に陣取れる一群の反對者も、手を拍つて哄笑せしにぞ、警視は頬を脹して暫ばし座りも得せざりしと云ふ、

青年辯士は水ガブ〜と飲で又た手を振り始めぬ、「諸君が露西亞討たざるべからずと言ふけれ共ダ、露西亞の何物を討つと言ふのです」

「露西亞帝國を征伐するんだ」と叫ぶものあり、

辯士は聲せし方に向て「果して然らば僕は、我輩は——」

一隅の聴衆ワア〜と冷笑す、

「我輩は諸君の態度が可笑しいと思ふです、即ち諸君は自家撞着です」

「何故自家撞着だ——馬鹿、小僧、引ッ込め」と例の階上の左側より騒ぐ

「主戦論者は其通り無禮背徳だ」と階下より見上げて應戦するもあり、

辯士は額の汗拭ひつゝ「看給へ、露西亞帝國政府の無道極制は、露西亞國民の敵ではありませんか、然れ共獨り露西亞政府のみでは無いです、各國政府の政策と雖も、其の手段に露骨と陰險の相違はあるか知れませぬが、其の精神は皆な露西亞と同じ侵略主義ではありませぬか」

喝采湧くが如くにして階上左側の妨害を埋没する利那、警視は起てり「辯士、中止」

「見ろやアイ」「民主々義萬歳」など思ひ〜の叫喚沸騰して、悲憤の涙を掬びたる青年辯士の降壇を送れり、

聴衆の少しく静まるを待つて、司會者の椅子を離れたる渡部伊蘇夫は、澄み渡る音聲に次の辯士を紹介す「篠田長二君——演題は社會黨の……」

皆まで言はさず、喝采の聲、堂を動かせり、篠田は既に演壇に立てり、絶叫の聲は拍手の間に響けり、満場既に酔ひぬ、

反對者の冷笑熱罵も、を先途と沸き上れり、『露探』『露探』『山木の婿の成りぞこれ奴』『花吉さんへ宜しく願ひますよ』

彼は徐ろに口を開きぬ『諸君——』

此時、聴衆の頭上を飛ぶが如くに駆け來れる一警部が、演壇に飛び上がつて、何事か警視に耳語せり、

警視は倉皇、椅子を蹴つて起てり『解散——辯士——中止』

満場總立となれり、警官力を極めて制すれ共聴かばこそ、『革命』『革命』『革命』良久見てありし篠田は、右手を伸ばしぬ、

『静に』

群衆は舌を留めて篠田を見たり、

二十四の一

『火に油注ぐ者の火傷は、我等の微力に救ふこと出来ませぬ』
彼は一揖して去れり、
満場再び湧き返へれり、玻璃窓の碎くる響凄まじし、

中仙道熊谷を、午後の六時廿分に發したる上武鐵道の終列車は、七時廿六分に波久禮驛に着きぬ、

秩父の雪の山嵐、身を切るばかりにして、戸々に燃ゆる夕食の火影のみぞ、暮はるゝ、
『馬車が出ますよ』と、爐火を擁して踞まりたる馬丁の濁聲、闇の裡より響く、『吉田行も、大宮行も、今ま直と出ますよ』

都の巷には影を没せる圓太郎馬車の、寂然と大道に傾きて、瘦せたる馬の寒天に俯して藪を食めり、

二臺の馬車に、客はマバラに乗り込みぬ、去れど御者も馬丁も悠々寛々と、爐邊に饒

舌を鼓しつゝあり、

『ヲ、イ、馬丁さん、早くしてお呉れよ、軀がちぎれて飛んで仕舞いそうだ——戯
謙じやねえよ』と、車の裡なる老爺は鼻汗すゝりつゝ呼ぶ、

『まア、飛ばねえように、繩でも縛つて置いてお呉れなせえ、此方の軀もちぎれ
ねえように、今ま一杯行つてくからネ』御者は又た濁酒一椀を傾けつ『べら棒に寒い
晩だ』と星晴れたる空を仰ぎながら、ノソリノソリと打ち連れて車臺に上りぬ、
月は出でぬ、

雪の峰、玲瓏と頭上に輝き渡り、荒川の激湍、巖に吠へて、眼下に白玉を砕く、暖き
春の日ならんには、目を上げて心酔ふべき天景も、吹き上ぐる川風に、客は皆な首を
縮めて瞑黙す、御者の鼻唄も暫ばし途断れて、馬の脊に鳴る草鞭の響、身に浸みぬ、
吉田行なる後なる車に、先きの程より對坐の客の面、其の容體、訝しげに眺め入りた
る白髪の老翁、やがて慇懃に禮を施し『旦那、失禮なこと伺ふ様ですが、矢つ張り此

の山の人で在つしやりますか』

對座の客は首肯さつ『ハイ、山の男ですが、只今は他郷に流浪致し居りまするので』

『して、山は何の邊で在つしやりますか』

『栗野で御座います』

老人は良久思案の態なりしが『——若し篠田様——の御縁家では——』

『ハイ、篠田の一族で御座います』

『篠田長左衛門様の——』

『左様です、長左衛門の倅で』

『左様で御座りまするか』と老人は膝の下まで頭を下げつ『先刻からお見受け申す
所が、長左衛門様生寫で在つしやるから、若し左様では在つしやるまいかと考へまし
たので』

老人は早くも懐舊の涙に得堪へぬもの、如し『私は小鹿野の奥の權作と申しますもの

で、長左衛門様には何程御厚情を蒙りましたとも知れませぬ、——彼の騒で旦那様は彼した御最後——が、百姓共の爲めにお果てなされた長左衛門様の御恩を忘れてはならねえと、若い者等に言ふて聽かせることで御座ります——じやあ、貴郎は儘に長二様と仰しやりました坊様で、イヤ、どうも立派な男に御成りなされました、全然先旦那様に御目に掛るようで御座りまする』

「左様でありましたか」と篠田はうなづき『幼少で飛び出しましたので、誠に知人が少ないですが、故郷の山、故郷の水、故郷の人、事に觸れ時に従ひて、故郷程懐しさものはありません』

「伯母御様は御達者で在つしやりまするか、永らく御目通りも致しませぬが——」

「ハイ、御蔭様に別状も無いようですが——私も久しく無沙汰致しましたから、一寸見舞にと思ひまして』

『成程』

「ジャ、與太、吉田屋の婆さんに能く言ふて呉れよ、何れ近日返金するつてツたつてナ」と前車の御者は喚きつゝ、大宮行の馬車は國神宿に停車せり、
「どうせ、貴様から返金して貰へるなんて思つちや居ねえツて言つたよ——其れよりかお竹の阿魔に、泣かすに待てるツて傳言頼むぞ、忘れると承知しねえぞ」と後車の御者は答へつゝ、篠田と老人とを乗せたる一輛は、驀地に孤り奔せぬ、
「旦那、此界限もヒドク寂れましたよ」と老人は歎息ちつ、

二十四の二

雪の坂路を、馬車は右に左にガタリと揺れつゝ上り行く、馬の吐息氷りて煙の如し、

夜は既に十時に近からんとす、

「最早丁度、十年——廿年になりますナ」と老人は首傾け「イヤ、どうも月日の經つと云ふは早いもので、未だほんの昨日の様な氣が致し居りまするか」長大息を漏らし

て彼は篠田の面をシケ〜見入りたり「土地のことも知らぬへ、言葉さへ譯らぬえ様な役人が来て、御維新は己が成たと言はぬばかりに威張り散らす、税は年増しに殖える、働き盛を兵隊に取られる、一つでも可いとは無えので、其處で長左衛門様の御先達て朝廷へ直訴と云ふことになつたので御座りましたよ、其れを村の巡査が途方も無い嘘ッばちを吹聴して、騒動が始まるなんて言ひ振らしたので、氣早の連中が大立腹で打を食はせる、憲兵が遣つて来るワ、高崎から鎮臺が押し寄せるワ、到頭長左衛門様は鐵砲に當つて、彼したことに成りなされたので——」

老人は暫ばし目を塞ぎて心に浮ぶ當時の光景を偲びつ「其れから皆なして遺憾を、御宅へ擔いて参りましたが、——御大病の御新造様が態々支關まで御出掛けなされて、御丁寧な御挨拶、すると旦那、貴郎だ、其時丁度十二三の坊様が、長い刀を持ち出しなされて、父ちゃんの復讐に行くと言ひなされる、其れを今の栗野に御座る伯母御様が緊乎抱き留めておすかしなされる——イヤもう、皆な御庭に座つて泣きましたよ」

老人は聲曇らせて月影に面を背向けぬ、

「御老人と」篠田もソ、る懐舊の感に打れやしけん、

袂より取り出せる襦袢もて老人は鼻打ちかみ「其れから間もなく御新造様は御亡なり、貴郎は伯母御様に手を引かれなすつて、栗野の奥へ行かしやる、——何でも長左衛門様の讐討たんじやならねエと言ふんで、伯母御様の所から逃げ出しなすつて、外國迄も行つて修業なすつて、偉い人にならしやつたと云ふことは薄々聞いて居ましたか、——どうも思ひ掛けねエ所で御目に掛りまして、昔時のことがアリ〜と目に見へるよう御座りやす」

「御老人、貴所の様に、長い目で御覽になりましたらば、世の變遷が能く御見へになりませうが、借て自分一身を顧みますると、實にお耻かしい次第でありましてナ、亡き父などに對しても、誠に面目御座いません」

「いや〜、左様で無い、何でも偉い人に成らしやつたと云ふ取り沙汰で御座りま

する』と、老人は首打ち振り『が、先日那樣も偉い方で御座りましたよ、二十年前に心配しなすつた通りに、今は成り果て、仕舞いました、何だ角だと取られる税は多くなる、積れる作物に變りは無い、其れで山へも入ることがならぬ、草も迂濶対することがならぬ、小兒は學校へ遣らにやならぬ、借金が出来る、田地は段々に他の物になる、旦那今此の山中で、自分の田を作つて居るものが幾人ありますか、——其上に厄介なものがありますよ、兵隊と云ふ恐ろしい厄介物が、聞けば又た戦争とか始まるそ、うで、私の村からも三四人急に召し上げられました、兵隊に取られるものに限つて、貧乏人で御座りますよ、成程其筈で、年中働いて居るので、身體が丈夫、丈夫だから兵隊に取られる、——此頃も郡役所の小役人が帽子など被つて來まして、國の爲めに死ぬんだ、有難いことだなんて言ひましたが、斯様馬鹿な話がありますか、——近い例證が十年前の支那の戦争で、村から取られた兵隊が一人死にしましたが、ヤア村の譽になるなんて、鎮守の杜に大きな石碑建て、役人など多勢來て、大金使つて、大騒

きして、お祭を行りましたが、一人息子に死なれた年老つた両親は、稼人が無くなつたので、地主から、田地を取り上げられる、税を納めぬいので、役場からは有りもせぬ家財を賣り拂はれる、抵當に入れた馬小屋見たよな家は、金主から逐つ立てられる、到頭村で建て、呉れた自分の息子の石碑の横で、夫婦が首を縊つて終いましたよ、爺と媪の情死だなんて、皆な笑ひましたが、其時も私、長左衛門様の御話して、斯なることを見透して御座つたと言ふて聽かせましたが、若い者等は、へい其様人があつたのかなと驚いて居ましたよ、最早村の奴せえ御恩を忘れて居ります様なわけで——』老人は鼻汗すゝり上げつ『どうせ私などは明日にも死ぬ身だから、關やせぬような物で御座りますが、子供等が可哀そうでなりませぬ、何卒、旦那——長二様、一つ長左衛門様の魂魄を御繼ぎなされて、此の百姓共を救つて下さりまし——』

石にや乗り上げ、ん、馬車は顛覆せんばかりに激動せり、

『畜生、何をフザけやかるッ』御者は續けさまに鞭を鳴らして打てり、

「オ、可哀さうだ、餘り酷くしなされるナ」と、老人は御者をなだめつ、馬車はやがて吉田に着きぬ、

「では、御老人、お別れ致します」篠田は老人の手をシカと握りて斯く言へり、權作爺は幾度も何か言はんと欲して遂に言ふこと能はざりき、栗野の方へ雪踏み分けて坂路を辿る篠田の黒影見へずなる迄、月にすかして見送りぬ、涙に霞む老眼、硬き掌に押し拭ひつゝ、

二十四の三

權作老人と立ち別れて篠田は、降り積む雪をギイ／＼と鞋下に踏みつゝ、我が伯母の孤り住む栗野の谷へと急ぐ、氷の如き月は海の如き碧き空に浮びて、見渡す限り白銀を延べたるばかり、

老夫の懐舊談に心動ける彼は、仰で此の月明に對する時、伯母の慈愛に負きて、栗野の山を逃れたる十五歳の春の昔時より、同じ道を辿り行く今の我に至るまで、十有六

年の心裡の経過、歴々浮び來つて無量の感慨抑ゆべくもわらず、只だ燃え立つ復讐の誠意、幼き胸にかき抱きて、雄々しくも失踪せる小さき影を、月よ、汝は如何に哀れと觀じたりけん、焦がるゝ如き救世の野心に五尺の體軀徒に煩悶して、鈍き手腕、其百萬の一をも成すこと能はざる耻かしさを、月よ、汝は如何に甲斐なしと照らすらん、森々として死せるが如き無人の深夜、彼はヒシと胸を抱きて雪に倒れつ、熱涙混混、誰憚らず聲を放つて泣きたりしが、忽ちガバと跳ね起きつ、足を踏みしめ、手を振つて、天地も動けと呼ばりぬ、

翠の帳、きらめく星　白妙の牀、かゝやく雪　宏なる哉、美しくしの自然
誰が爲め神は、備へましけむ、

峯の嵐は、眠りたり　谷の流は、夢のうち　隈なき月の冬の影　嚴かにこ

そ、静なれ、

眼閉づれば遠く近く、何處なるらん琴の音響さゆ
頭揚ぐれば氷の上に 冷
えたる軀一ツ坐せり 兩手振つて歌唄へば
山彦の末見ゆ、高きみそら、

感謝の聲の天のぼり 琴の調に入らん時 歌にこもれる人の子が 地上の
罪の響さなば 弾く手といめて天津乙女 耻かしの色や浮ぶらめ、

父の正義のしもとにぞ 瀆れし心ひれ伏さむ 母の慈愛の涙にぞ 罪のゆ
るしを求め泣く 御神よ我を逐ふ勿れ 神よ汝が子を逐ふ勿れ

神の心を摸型の 人てふ旨を忘れてき 神の御園の海山を 血しほ流して

争へり、

萬象眠る夜の床 人に逐はれし人の子の 天地を恨む力さへ 涙と共に涸
れはて、 空く急ぐ滅亡を 如何に見玉ふ我神よ、

天つ御國を地の上に 建てんと叫ぶ我が舌に、 燃ゆれと盡さぬ博愛の 永
久の焰恵みてよ、

熟睡の窓に束の間の 罪逃がれにし人の子を 虚無の夢路にさゝやきて
聖き記憶を呼びさませ、

星の帳、雪の牀 くしく宏なる準備かな 只た頽廢の人の心 悲しくも

住むに堪へざるを、
彼の面は嬉々と輝きつ、髯の水打ち拂ひて、雪を蹴つて小兒の如く走せぬ、伯母の家は彼の山角の陰に在るなり、

二十四の四

樹の間より燈影の漏るゝ見ゆ、伯母は未だ寝ねずあるなり、
細き橋を渡り、狭き崖を攀ちて篠田は伯母の軒端近く進めり、綿糸紡ぐ車の音微かに聞こゆ、彼女は此の寒き深夜、老ひの身の尙ほ働きつゝあるなり、

『伯母さん』篠田はホト／＼戸を叩けり、

車の音止みぬ、去れど何の答もなし、

篠田は再び呼べり『伯母さん』

『誰だエ』と伯母は始めて答へぬ、

『伯母さん、私です』

『フ、——長二じやないか』倉皇として起ち來る音して、歪みたる戸は、ガタビシと開きぬ、

『マア——』と驚きたる伯母は、雪に立ちたる月下の篠田を、嬉しげにツク／＼と見上げ見下ろせり『能く來てお呉れた、先頃の手紙に、忙しくて當分行くことが出来さうも無いとあつたので、春暖かにでもならねばと思つて居たのに、——嗚ぞ寒むかつたろう、今年は珍らしい大雪での、さア、お入り、私ヤ又た狐でも呼ぶのかと思つたよ』

『狐と間違へられては大變ですネ』と、篠田は莞然笑傾けつ、框に腰打ち掛けて雪に冰れる草鞋の紐解かんとす、

『お前が來ると知つて居りや、湯も澤山、沸かして置いたのに』と伯母が爐上の茶釜をせゝるを、『なに、伯母さん、雪路だから、足も奇麗ですよ』と、篠田は早くも上りて爐邊に座りぬ、

昔ながらの松明の覺束なき光に見廻せば、寡婦暮らしの何十年に屋根は漏り、壁は破れて、幼くて我引き取られたる頃に思ひ較らふれば、いたく頽廢の色をぞ示す、

「まア、長二、お前はんとに吃驚させて、斯様嬉しいことは無い」と、山の馳走は此れ一つのみなる楕堆きまで運び來れる伯母は、イソ／＼として燃え上がる火影に凜然たる姪の面ながめて『何時も丈夫で結構だの、餘り身體使ひ過ぎて病氣でも起りはせぬかと、私や其ればかりが心配での』と言ひつゝ見遣る伯母の面は、何時もながら若々として、神々しさばかりの光澤漲れど、流石に頭髮は去年の春よりも又た一ときは白くなり増りたり、

楕の煙は「自然の香」なり、篠田の心は陶然として酔へり、『私よりも、伯母さん、貴女こそ斯様深夜まで夜業なさいましては、お體に障りますよ』

「なんの、長二」と伯母は白き頭振りつ『身體は使ふだけ健康だかの、お前などは、心氣を痛めるので、大毒だよ——今ではお前も健康の様だが、生れが何せ、脆弱

い質で、五歳六歳になるまでと云ふもの、全で薬と御祈禱で育てられた軀だ——江戸の住居も最早お止めよ、江戸は塵と埃の中だと云ふじや無いか、其様中に居る人間に、何せ満足なもの、在る筈は無い、今ま直ぐと云ふわけにもなるまいが、何卒伯母の健康な中に左様しなさい、山姥金時で、猿や熊と遊んで暮らそうわ、——其れは左様と、今度は少し裕然泊つて行けるだろうの——』

篠田は頭掻きつゝ、口ごもりぬ『——先日も手紙で申上げたような次第で、當時差し懸つた用事がありますので、殆ど足を抜くことが出來ないのですが——何だか無闇に貴女が戀しくなつたもんですから、今日不意に出掛けて参つたような始末でして手——』

伯母は怪訝な目して良久篠田を見つめしが『——又た昨日のつくり話しませう、疲れたるうに早くお寢み、例の所にお前の床がある、——氣候が寒いので、風邪でも引かれると大變だ』

「貴女こそ早くお寝みなさい」と篠田は笑ひぬ、

「何の、私は寝たよりも醒めてる方が楽だ——此の綿を紡で仕舞はんじや寐ないのが、私の規定だ、是れもお前の裕を織る積なので——サア、早くお寝み」

「左様ですか」と篠田は暗涙を呑で身を起しつ「誠に、恐縮に御座ります」と襖開きて、慣れたる奥の入室に入れり、

伯母は膝に手を組んで頭を垂れぬ「——何か只ならぬ心配があると見へる——此の私を急に戀しくなつたと云ふのは——彼の剛情な男が——」

二十四の五

「長二や、大層早起の、何時起きたのか、ちつとも知らなかつたよ」と言ひつゝ、伯母は内より障子開く、

椽端には篠田が悠然と腰打ち掛けて、朝日の光輝く峯の白雪眺めつゝあり、「そりや、伯母さん、私の方が早く寝ましたから子——が、伯母さん、どうも實に閑静です

ねエ、全く別天地です、此の節々が延々しますよ」

「だから、江戸の様なせゝこましい所で、無駄な苦勞せず、早く先祖代々の故郷へお歸りと云ふのだ——頼朝様よりも前から住んで居るので、何殿に頭を下げにやならぬと云ふ様な心配もなしさ」

「然かし、伯母さん」と篠田は笑みつ「猿や狐の友達も可いが、人間は矢張り人間の相手が無ければ、寂しくて堪りませんよ、私は又た伯母さんが、能く斯して孤獨で居なされると不思議に思ふですよ、何です、一つ江戸住と改正なされたら」

「ヲ、飛んだことを、何の長二や、寂しいことがあるものか、多勢寄つて来るので、夜も寝るのが惜い程賑かだ」

「へエ、何處から其様に人が参りますか」と篠田の訝かるを、伯母は事も無げに首肯さつ「私の知つとる程の人が、皆な寄つて来るよ、——お前の阿父も来る、阿母も来る、祖父も祖母も来なざる、——其れに、長二、私の許嫁で亡くなつた、お前の義

伯さんも来るの、其れに斯うしてお前も偶には来て呉れる、斯様嬉しいことがありま
すか」

ハ、と思はずも篠田は笑いつ「じや、伯母さん私も佛様の御仲間入するんやすネ」
『左様サ』と伯母は首肯さ『神様か佛様か知らないが、矢ッ張り人間の様だよ、妙
なもので、人は生きて居た時よりも、死んだ後の方が皆んな善くなるよ——生きてた
時分には、怒り合つたこともあろうし、怨み合つたこともあろうが、一度死ぬと、悪
い所は皆な墓場へ葬つて、善い所だけが靈魂に残るものと見える、其れに死んだ人
は、羨ましいことに、年と言ふものを取らないので、誰も彼も皆な若いよ、お前の阿
父でも阿母でも皆な若いよ、——私の亭主も丁度二十歳で亡つたが、其時の姿の儘で
目に見へる、私の頭が斯様に白くなつたので、どうやら耻かしい様な氣がして、最早
何時にも鏡と云ふもの見たことが無いよ——』
ほッほッと片頬に寄する伯母の清らけき笑の波に、篠田は幽玄の氣、胸に溢れつ、振

り返つて一室に煤げたる佛壇を見遣れば、金箔剥げたる黒き位牌の林の如き前に、年
経て臙氣なる一個の寫眞を安置せらる、是れ此の伯母が、未で合衾の式を擧ぐるに及
ばずして亡き數に入りたる人の影なり、

伯母もチヨと其方を見やりつ「いつであつたか、彼の寫眞が判らぬ様になつたので、
大きな油繪とやらに書き代へようと親切に、お前が言ふて呉れたが、ナニ、決して其
れには及びませぬよ、寫眞の顔などは見へなくなる程が可いよ、——そりやお前、繪
姿なんてものは、極り切つた顔して居るばかりだけれど、此の心に映る姿は、物も言
へば、歩きもする、怒りもすれば笑ひもする、斯様自由自在なものには有るまいよ』

『成程』と、篠田は瞑目して、伯母が言葉の端々深く味ひつ、
伯母はほッほと獨り笑ひつ『私や、まあ、勝手なことばかり言つて居たが、長二や、
其れよりもお前の嫁の決らないのが、誠に心懸りだよ、何だエ、未だ矢ッ張り心當り
が無いが、——江戸あたりの埃の中には、お前の氣に協つたものは有るまいが、ト云

つて山の中にも無し、ほんに困つて仕舞ふたよ』と首傾けて屈托の態なりしが、『ほう』と一つ己が膝叩きつ『どうだエ、長二、お前 亞米利加とかで大層お世話になつた婦人があるじや無いか、偉い女性だとお前が言ふのだから、大した人に相違なかるが、一つ其婦人を貰ふわけにやなるまいか、異人でも何でも構やせぬよ、其れに御亭主の無い婦人だとお言ひじやないか、エ、長二』

篠田は腹を抱へて噴飯せり、

『イエ、本當の話だよ』と伯母は益々眞面目也、

『伯母さん、兼てお話しした通り、偉い女性に相違ありませぬがネ、——伯母さんより十歳も上のお婆さんですよ』

『何だエ』と伯母は眼を圓くし『其様豪い婦人で、其様歳になるまで、一度もお嫁にならんのかよ——異人でもものは妙なことするものだの』

『別に不思議はありませぬよ、現に伯母さんも左様じやありませんか』

『ナニ、私ヤ、是れでもチャンと心に亭主があるのだよ』

『其れならば、伯母さん、御安心下さい、私もチャンと花嫁がありますよ』

篠田は晃々たる雪の山々見廻はして、歡然たり、

『ヲ、お嫁があるトエ』と伯母は驚くまでに打ち喜び『して、其れは何時をめました、早く知らせて呉れれば可いに』

『なに、伯母さん、改めてお知らせする程のこと無いです、最早疾くの昔時のことですから』

『ほッほ、何を長二、言ふだよ、斯様老人をお前、弄るものじや無いよ、其れよりも、まア、何様婦人だか、何故連れて来ては呉れないのだ』

『伯母さん、最早、貴女にも御紹介した筈ですよ』

『虚言ふて』と伯母は口開いてカラ〜と打ち笑ひ『私がお前のお嬢さんを忘れて可いものかの』

「サ、伯母さん、私の花嫁と云ふのは、其の「おかみさん」のことですよ」

「其のお嬢さんの名は何と言ふのだの」

「おかみさんと云ふのです」

「長二や、お前、何を言ふだ」と、伯母は又も聲高く笑ふ、

「伯母さん、本當の話です、神様が私の花嫁のです、——父とも母とも花嫁とも、有らゆる一切です」

「へエ」と、伯母と良久言葉もなく、合點行かぬ氣に篠田の面を目もれり「お前の

神様のお話も度々聞いたが、私には何分解らない、神様が嫁さんだなんて、全然怪物

だの」

「怪物じゃ無い、人ですよ、人の大きいのです、必竟、人が神様の小さいのと思や

可いですよ」

「左様云ふものかの」と伯母は思案の首傾けつ、

「現に伯母さん、貴女の所へ私の両親も来る、貴女の旦那様も来ると仰しやつたでせう——怪物でも、不思議でもありませんよ」

「だがの、長二や、其れは皆な私の知つて居る人達だが、お前の嫁の其の神様に

は、お前、お目に掛つたことがあるかの」

「左様ですぬエ——思ひに惱む時、心の寂しい時、氣の狂ほしい時、熟と精神を凝

らして祈念しますと、影の如く幻の如く、其の面も見へ、其聲も聴こゆるですよ、

伯母さんのと格別違ひりますますまい」

「其れは長二や、未だお前には早過ぎるようだよ」と伯母は頭を振りぬ「私も結句

孤獨の方が好いと、心から思ふようになったのは、十年以來くらいなものだよ——今

だから洗い滌い言ふて仕舞ふが、二十代や三十代の、未だ血の氣の生々した頃は、人

に隠れて何程泣いたか知れないよ、お前の祖父が昔氣質ので、假令祝言の盃はしな

くとも、一旦約束した上は、後家を立て通すが女性の義務だと言はしやる、當分は其

氣で居たもの、マア、長二や、勿體ないが、父を怨んで泣いたものよ——お前は今年幾歳だ、三十を一つも出たばかりでないか、お前がどんな偉い人になつたにしても、マサか仙人では有るまいわ、近い話が、何か身動きもならぬ程に忙しい中を、斯様何の相談相手にもならぬ私を戀しがつて、急に思ひ立つて來ると云ふも、神様の嫁御では、物足らぬからではあるまいか、エ、長二、お前が何程物識でも、私の方が年を取つて居りますぞ』

篠田は腕拱きて深思に沈みつ、
子を伴へる雌雄の猿猴が、雪深き谷間鳴きつゝ過ぐる見ゆ、

二十五の一

篠田の寂しき臺所の火鉢に凭りて、首打ち垂れたる兼吉の老母は、未だ罪も定まらで牢獄に呻吟する我が愛兒の上をや氣遣ふらん、折柄誰やらん訪ふ聲に、老母は狭き袖に涙拭いて立ち出でつ『ヲ、花ちゃん——お珍らしい、能くお入來だネ、さア、お

上りなさい、今もネ私一人で寂しくて困つて居たのですよ——別にお變りもなくて

『ハア、——老母も——』と、嫣然として上り來れるお花は、頭も無雜作の束髪に、木綿の衣、キリ、着なしたる所、殆ど新春野屋の花吉の影を止めず、『大和さんは學校——左様ですか、先生は不相變御忙しくて在つしやいませうねエ——今日はネ、阿母、慈愛館からお聴が生ましてネ、御年首に上つたんですよ、私、斯様嬉しいお正月をするの、生れて始めていせう、是れも皆な先生の御蔭様なんですからねエ——其れに阿母、兼さんから消息がありましたテ、私、始終氣になりました』
老母の目は復た忽ち涙に曇りつ『——豫審とやらは此頃やうやく濟んだそらですが子

『左様ですツてネ——其事は私も新聞で見ましたの、——六ヶ敷文句ばかり書いてあるので、能くは解りませぬでしたが、何でも兼さんに、小米さんを殺すなんて悪心

が有つたのでは無いと云ふように思へましたよ、矢ッ張裁判官でも人ですから、少しは同情があると見へますわねエ、だから阿母、餘り心配なさらぬが可御座んすよ』

『難有うよ』と老母は臉拭ひつ『此程も倅のことを引受けて下だすつた、辯護士の方が来しつたんでネ、先生様の御友達の方で、御兩人で種々御相談なすつて在しつたがネ、君是れ程筋が立つて居るのに、若し兼吉を無罪にすることが出来ないならば、辯護士を廢めて仕舞へと、先生様が仰しやるじやないか、すると其方もネ、可しい約束しやうと仰しやるんだよ、花ちゃん、私、嬉しくて……』

『本當にねエ、阿母』と、お花はブル〜と身を震はしつ『何と云ふ御親切な方でせう、——私、考へる毎に——』と、面忽ちサと紅らめ『彼の様にお忙しい中で、私共のことまであれも是れもお世話下さるんですもの、何して阿母、世間態や人前の表面で、出来るのじやありませんわねエ——近頃は又戦争が始まるとか、忌な噂ばかり高い時節ですから、夜分お歸りも嘸ぞ遅くて在つしやいませうねエ』

『左様ですよ、おつちりお寐みなさる間も無くて在つしやるので、御氣の毒様でネ、ト云つて御手助する譯にもならずネ——其れに又た何か急に御用でもお出来なされたと見へて、昨日新聞社から直ぐに御郷里へ行らしつたのでネ』

『あらッ』と、お花は驚き顔『じや先生は御不在なんですネ——まア——何時御歸宅になるんですの』

『端書で言ふて御遣しになつたのだから、詳しいことは解りませんがネ、明日の晩までには、お歸宅になりませうよ、大和さんが左様言ふてらしたから、だから花ちゃん、丁度可い所へ来てお呉れたわネ、寂しくて居た所なんだから』

『私、まア——じや、私、お目に掛ること出来ないんですか——』
『そんなに急ぐのかネ、花ちゃん、たまのことだから、少しは遊んで行つても可いでせう、外の處じや無いもの』

黙つてお花は頭を振り『明日の正午までには是非歸館らねばなりませんの』

ガラリ、格子戸鳴りて、大和は歸り來れり『やア、花ちゃん、來つしやい、待つてたんだ、二三日、先生が御不在なので、寂しくて居た所なんだ』

『貴郎までが、——そんな——』とお花は泣きも出でなんばかり、

二十五の二

晚餐も果て、三人燈下に物語りつゝあり

『何だか、阿母、先生が御不在と思もや、其處いらが寂しいのねエ』とお花は、篠田の書齋の方願みつゝ、

『ほんとにねエ、在しつたからとて、是れと云ふ別段のことあるでも無いのだけれど』と、兼吉の老母も首肯さつ、

『本當に私、申譯ないと思ひますワ』とお花は急に思ひ出したるらしく『先生が私を御世話なすつて下さるのを、世間では彼此申すそうじやありませんか、私ヤ、何うせ斯様した軀なんですから、ちつとも關やしませぬけれど、其れじや、先生に御氣の

毒ですものねエ』

『なアに、花ちゃん』と、大和は番茶呑み干しつゝ、事も無げに笑ひて、『其様ことは先生に取つて少しも珍らしく無いのだ、此頃は尙だ酷い風評が立つてるんだ——山木の梅子さんて令嬢と、先生が結婚しなさんだッて云ふんでネ、是れには先生も少し迷惑して居なさん様なんだ、皆な先生を毀けやうとする者の卑劣な策略なんだから花ちゃん、左様心配しなさんに及ばないよ』

『左様でせうか』

『けれど大和さん』と老母は顔差し出し『ツイ此頃も、其の山木のお嬢様とやらの弟御さんが御來になつたで御座んせう、チラと御聞きたいけですから能くは解りませんけれど、其の御姉さんが何してもお嫁に行かないと仰しやるんで、ト、何か大變なことでも出来したと云ふ様な御話で御座んしたよ』

『ウム、彼の松島の一件か』と、大和は例の無頓着に言ひ捨てしが、忽ち心着きてや

両手に頭抱へつ『やッ』と言ひつゝお花を見やる、

『何しなすツたの』とお花も、松島と云ふ一語に顔赧らめぬ、

『なアに、花ちやんの爲にも矢張り敵なんだよ、彼の松島大佐がネ』と大和は茶受ムシヤ〜と噛み込みつ『彼が餘程以前から、梅子さんを貰ふとしたんだ、梅子さんの實父も、繼母の兄と云ふのも、皆有名な御用商人なんだから、賄賂の代りに早速承諾したんだ、所が我が梅子嬢は何しても承知しないんだ、到頭梅子さんを誘ひ出して、腕力で侮辱を與へようとしたもんだから、梅子さんも非常に怒つて、松島を片眼にしたんださうな、其れを宅の先生が何か關係でもあつて、左様させたように言ひ觸らして、先生の事業を妨害する奴があるんだ、或は梅子さんが先生を戀して居なさるかも知れんサ、大分世間で其の評判だから、けれど先生は御存知無いんだ、戀愛は其對手が承諾を與へた場合に始めて成立する、所謂双務契約なんだからなア』と、戀愛法理論を講釋したる彼は、グツと一椀、茶を傾けつ『何うも美人でものは厄介極まる、

僕は犬嫌ひだ、

老母もお花も轉がつて笑ひつ、

『それは、屹度、其のお嬢様も左様で在つしやいませうよ』と、老母はやがて口を開きて『先生様の様に、口數がお少なくて、お情深くて、何から何まで物が解つて在しつて、其れでドツしりとして居なさるんですもの、其ヤ、女の身になれば誰でもねエ』

『まア、厭な阿母』

『否エ、本當ですよ』

お花はランプの光眩し氣に面を背向けつ『けれど、其のお嬢様など、お幸福ですわねエ其様した立派な方なら、假令浮き名が立とうが、一寸も男の耻辱にもなりや仕ませんもの――』

大和は眼を圓くして、襟に隠埋めて俯けるお花の容子を、マジ〜と見つめぬ、

此夜お花は眠らざりき、

二十六

「今日は又た曇つて来た、何卒降雪ねば可いが」と、空眺めながら伯母は篠田を見送りの爲め、其の後に付いて、雪の山路を辿り来りしが「其う云ふ次第で、長二や、氣を着けてお呉れよ、此世に只だ伯母一人姪一人と云ふのじや無いか、——亭主には婚禮もせず遊ばれる、お前の阿父は彼の様な非業な最後をする、天にも地にも頼るのはお前ばかりのだ——まア、之を御覽よ」と、眼下に白き雪の山里指しつ「お前の阿父は此の秩父の百姓を助けると云ふので鐵砲に撃たれたのだが、お前の量見は其れよりも大きいので、如何災難が湧いて来ようも知れないよ、——斯様年老つた上に、逆事など見せて呉れない様にの——」

篠田も何とやらん後髪引かるゝよう「伯母さん、何卒心配せんで下さい、重々御苦勞を御掛け申して来た今日ですから——其れに私も既三十を越したんですから、後先

見ずのことなど致しませんよ、父にも母にも爲ることの出来なかつた孝行を、貴女御一人の上に盡くしたいのが、私の精神ですからネ」

伯母は涙堰さも敢へず「長二や、——私や、斯してお前と歩るいて居ながら、コツクリと死にたいようだ——」

ハ、と篠田は元氣克く打ち笑ひつ「何を伯母さん、仰しやる、今ま若し貴女に死なれでもして御覽なさい、私は殆ど此世の希望を亡して仕舞ふ様なもんですよ、何卒ネ、お軀を大切にしてください、其のうちに又た時を都合して参りますからネ」

「忙しかろうかの」と、伯母は小さき袂に溢るゝ涙押し拭いつ「何卒其うしてお呉れよ、年増しにお前が戀しくなるので、——其れに、復た言ふ様だが、私の一生の御願だでの、一日も早く嫁を買ふことにしてお呉れよ、——女房が無いで身締が何の角のなど、其様心配は、長二や、お前のことだもの少しも有りはせぬが、お前にしてからが何程心淋しいか知ればせぬよ、女など何の役にも立たぬ様に見へるが、偉い他人で

も其の真心には及びませんよ、——諄いと思ふだるが、お前の嫁の顔見ぬ間は、私は死にたくも死なれないよ』

篠田は答へんすべも無し、

願み勝ちに篠田は獨り下山り行く、伯母が赤心一語々々に我胸を貫きつ、

神に祈れど得も去らぬ、寂し心のなやみをば、戀てふものと伯母君の、昨日を論し玉ひたる

花の姿の美しと、乙女を見たる時もあれど、慕はしものと我が胸に、影をとめしことあらず、

地上の罪の同胞に、代る犠牲の小羊と、神の御前に献げたる、堅き誓の我なるを、

不信の波の何時しかに、心の淵に立ち初めて、底の濁を揚げつらん、今日まで知らで我れ過ぎぬ、

汝を戀ふるばかりに、柔しき處女の血にさへ汚れしを知らずやテフ聲、忽ち如何處よりか矢の如く心を射れり、山本梅子の美しき影、閉ぢたる眼前に瞭然と笑めり、
「おのれ、長二ツ」と篠田は我と我が心を大喝叱咤して、嚇とばかり眼を開けり、
重疊たる灰色の雲破れて、武甲の高根、雪に輝く、

二十七の一

濼水に映つる星影寒くして、松の梢に風音凄く、夜も早や十時に垂んたり、立番の巡査さへ今は欠伸ながらに、爐を股にして身を縮むる鍛冶橋畔の暗路を、外套スツポリ

と頭から被りて、弓町の方より出で来れる一黑影あり、交番の燈火にも顔を背向けて
 急ぎ橋を渡りつ、土手に沿ふて、トある警視廳官舎の門に没し去れり、
 彼の黑影はヤガて外套を脱して、一室の扉を押せり、室内は燈光明々として、未だ官
 服のままなる主人は、燃へ盛る暖爐の側に安然と身を大椅子に投げて、針の如き頬髯
 撫で廻はしつゝあり、
 扉の開かれし音に、ギロリとせる眼を其方に轉じつ『やや、吾妻』
 彼の黑影は同胞新聞の記者吾妻俊郎にぞわりける。
 吾妻は其の敏慧なる眼に微笑を含みつゝ、軽く黙禮せる儘、主人と相對して椅子に坐
 せり、『川地課長、やうやく捜し出しましたよ』
 言ひつゝ彼は裏なるポケットより一個の紙包を取り出して、主人に渡せり『今日後
 れりや、屑屋の手に渡る所なんで——大切な原稿を間違へて、反古の中へ入れちやつ
 たてなことで、屑籠を打ちあけさせて、一々擇り分けて、本當に酷い目に逢ひました

よ』
 主人は黙つて其の紙包を開けり、中より出でしは皺クチャになれる新聞の原稿なり、
 彼は膝頭にて稍々之を押し延ばしつゝ、口の裡にて五五行読みもて行けり
 ……彼の主戦論者の聲言する所を聞くに日露兩國の衝突は、自由と擅制との衝突に
 して、又た文明と野蠻との衝突……と云ふ、吾輩謂へらく決して然らず、是れ只だ
 兩個擅制帝國の衝突のみ、兩個野蠻政府の衝突のみ………財産の特權、
 貴族の遊食………總ゆる罪惡一に皇帝の名を假りて辨疎……
 川地は目を揚げて吾妻を見つ『慥に篠田の自筆か』
 『左様です、間違ありませんよ』
 『御苦勞〜』と川地は首肯さつゝ己がポケットの底深く藏め『是れが在れば大丈
 夫だ、早速告發の手續に及ぶよ、實に不埒な奴だ、——が、彼奴、何處か旅行したそら
 だが、逃でもしたのじや無らうナ』

吾妻は微笑みつ『なに、郷里へ一寸歸つたわけのです、今晚あたり多分歸京つた筈です、で、罪名は何とする御心算ですネ』

『左様さナ』と主人は頬撫てつ、『先づ不敬罪あたりへ持つて行くのだ、吹つ掛けは成るべく大きくないといからナ』

『エ、不敬罪ですつて』と吾妻は聲や、打ち頭へり、主人は鋭き眼して睨みぬ『何だ』

『なに、何もしやませぬがネ』と吾妻は心押し静めつ『何の道、大至急願いたいものです——僕は最早篠田の面を見るに堪へないですからネ』

吾妻の額には恐怖の雲懸る、

『何をビク／＼するんだ』と、主人は吾妻を一睨せり『其様ことで探偵が勤まるか』

——篠田や社員の奴等に探偵と云ふことを感付かれりや爲なかるな』

『なアに、外の奴等は感付く所か、僕が餘り篠田に接近すると云ふので、却て嫉妬』

して居る程です、ですから僕の流言が案外社員間には成効して、陰では皆な充分に篠田を疑つて居るですがネ——』言ひ淀みたる吾妻は、側なる小卓に片肘を立て、、惱まし氣に頭を支へぬ、

『其れが何したと云ふのだ、篠田の方は何したと云ふのだ』

『——課長』吾妻の聲を震へり『川地さん、——然かし篠田は覺つて居るらしいのです、慥に覺つて居るらしいのです』

『けれど吾妻、覺つて居ながら、探偵を近けて居る理由もなからう——特に彼云惡黨が』

『所が、其れが大間違いのです』と、吾妻は姿勢を正して吐息をつけり『川地さん、正直に言ふと、彼は偉い男ですよ、彼は慥に僕を探偵と知つて居るのです、其れで僕と差向の時には、必ず僕に説教するのです、彼は全然坊主ですナ、其眞實の言葉が、此の心の隅から隅まで探燈で照らし渡る様に感じて、怖くて堪らない』

彼は瞑目して暫ばし胸裡の激動を制しつ——ト云ふて、貴官の方へは、彼の罪迹を何か報告せねばならぬでせう——イヤ、其様せねば貴官の御機嫌が悪いでせう——けれど實を言ふと、僕には彼の罪惡と云ふものを發見することが出來ないんですもの——

川地の眼はキラリ輝けり「じゃ、吾妻、今日まで報告した彼奴の秘密は、虚事だと云ふのか」

「——悉く虚報と云ふでもありませんが——悉く眞實と云ふ事も困難です——」

「じゃ、吾妻、彼奴が山木の嬢を誘惑して、其の特別財産を引き出す工夫してると云ふのは、ありや眞實か何だ」

「——あれは少し違つてる様でした——」

「花吉を妾にして居ると云ふのは」

「あれも——少し違つて居ります」

川地は忿怒の聲荒々しく「九州炭山の同盟罷工教唆も虚報と云ふのか」

「イヤ、全然虚報と云ふでもありませんが——實は篠田は、同盟罷工に反對して、静肅なる手段を執ることを熱心に勸告したのです、其の往復の書信など僕は能く知つて居ますが、けれど勢ひ已むを得ないと云ふことになつたもんですから、然らば坑夫等を無慘の失敗に終らしめてはならぬと云ふので、最も困難な兵糧方に廻つたのです、だから彼が教唆したと云ふのは、少し眞實に遠い様でもありませんが、彼が無かつたら坑夫の同盟も、今度の労働者團結も成立つことではありませんから、彼が教唆したと報告したのも、結果から言へば全然虚報とは言はれぬ様にもなる次第のです」例の快辯に似もやらず、吾妻は汗を拭ひつゝ辯疏せり、

「吾妻、全で貴様は政府を欺いて、我等を欺いて、機密費を盗んで居たのだ」

「けれど」と、吾妻は少しく椅子を後に退け「其ヤ課長、無理ですよ、初め僕が同胞社に這入り込んだ頃、僕は報告したじゃありませんか、外で考へると、内で見ると

は全く事情が違つて、篠田と云ふ男、實に敬服すべき君子だと申し上げたでせう、スルと貴官は大變に立腹して、其様筈が無い、何かあるに相違無い、政府の方針は飽く迄も社會黨撲滅と云ふことであるから、若し其に好都合な申告を爲ないと、今度は警察の無能と云ふんで、我々の飯の食い上げになる、だから何でも可いから持つて來い、虚誕を組立て、事實を織り出すのが探偵の手腕だと——』

『馬鹿ッ』

『馬鹿じやありません、今度も左様です、松島が負傷したに就て、軍隊や元老の方からも入釜しく言ふて來て困る、是非何とかして、篠田を引ッ縛らねばならぬからと言ふんでせう——其りや成程、僕が最初篠田と山木の嬢と、不正な關係がある様に虚誕を報告して置いた結果で仕方ないですが——』

川地は再び大喝せり『馬鹿ッ』

二十七の二

吾妻のワナ〜と顧へる面を、川地課長は冷かに眺めて『其の態は何だ、吾妻、貴様も年の若いに似合はず役に立つ男と思つて居たが、案外の臆病だナ、其れでも警察の飯を食つて居るのか』

吾妻は頭押へつ、『——其や僕も、爺の脛を食ひ荒して、斯様探偵にまで成り下つたんだから、随分惨酷なことも平氣で行つて來たですが、——篠田には實に驚いたので、社會黨なんぞ、どうせ陰險な亂暴なものだと思つて這入り込んだのだが、秘密と云ふものが殆ど無いのです——以前始めて社會民主黨を組織するツてた時も、左様でしたよ、タシが土橋だと思ふが、彼の渡部と云ふ男の所へ出掛け行くと、先方が却て歓迎して起草しかけて居た宣言書を見せて、一々講釋をされたので、社會主義ツてものは、實に可いものだと思ふと感服し切つて來たが、僕も本當に左様思ひますよ、川地さん、貴官は篠田を惡黨だの何のと言ひなさるけれど、試に一度逢つて御覽なさい、屹度従來の誤解を慚愧なさるに相違ありませんよ——僕は斯う云ふ好人物を毀けねばな

らぬかと思ふと、如何にも自分ながら情なくなつて、寧ろ自分の探偵と云ふことを白
状して、本當の子分にして貰ふかと思つたことが、幾度とも知れませんが、近來は最
早怖くて堪らぬから、逢はぬやうに〜にと、篠田を避けて居るんだ」
川地は大口開いてカラ〜と笑ひつゝ「吾妻、貴様もエライ善根があるんだナ、感心だ
よ」

「假令斯様になつても、未だ人間には相違無いからネ」と、吾妻は首肯さ「然かし、
もう斯うなるからは、何卒篠田に面を見られない様にして貰いたいのだが、其の論文
にしても、何も不敬罪とは覺束ないからナ、裁判は警視廳や内務省が爲るんで無いから
ナ——何程牽強附會をした所で、官吏侮辱位のものだ、二月か三月の重禁錮だ、
僕ア外國へ逃げでもしなけりや、安心が出来ませんよ」

「非常な心配だナ」と、川地は冷笑しつゝ、「其れなら我輩も一ツ善根の爲めに、貴様
を救つて、篠田を一生娑婆の風に當てないやうにして遣らう」

「笑談言つちやいけませんよ、何程意氣地の無い裁判官でも、警視廳の命令に従ひ
はしませんからネ」

「馬鹿だなア」と川地はボカリ煙草を喫しつゝ、「裁判官は只だ法廷で、裁判するだけ
の仕事じゃ無か——法律なんて酌子定規に拘泥して、悪黨退治が出来ると思ふか——
フ、ム」

吾妻は暫ばし川地の面ながめ居りしが、忽如、蒼く化りて聲ひそめつゝ「——じゃ、又た
肺病の微菌でも呑まそうと云んですか——」

川地は黙つてスイと起ちつゝ「吾妻、居室へ來給へ、一盃飯やう——骨折賃も遣らうサ」
去と吾妻は悄然として動きもやらず「——考へて見ると警察程、社會の安寧を壞るも
のは有りませぬねエ、泥棒する奴も悪いだろうが、捉へる奴の方が尙ほ悪黨だ」

「社會の安寧？」と川地は苦笑しつゝ「何も、皆な飯の種サ」
吾妻は低聲獨語しぬ「飯の種、——飯の種」

大洞別荘の椿事以來、梅子は父剛造の爲めに外出を嚴禁せられて、殆ど書齋に監禁の様なり、繼母の干渉劇しければ、老婆も今は心のまゝに出入すること能はず、妹芳子が時々來りては、父母が梅子に對する悪感情を、傲りがに傳達しつ、又た姉の悲哀の容態をば尾緒を付けて父母に披露す、芳子は流石にお加女夫人の愛兒なり、梅子の苦悶を見て自ら喜び、姉を讒訴して、母を喜ばしむ、只だ前よりも一層眞心を籠めて彼女を慰め、彼女を獎まし、唯一の楯となりて彼女を保護するものは剛一なりける、剛一は千葉地方へ遠足に赴きて二三日、顔を見せざるなり、雨蕭々として孤影寥々、梅子は燈下、思ひに惱んで夜の深け行くをも知らざるなり、

「ア、剛さんは如何なすつたでせう、今夜はお歸りの日取なんだが、今頃までお歸らないのは、大方此の雨でお泊りのでせう、お一人なら雨や雪に頓着なさる男上やないけれど、お友達と御一所では、左様もならないからネ」

彼女は机上の置時計を見て獨語せり、

「ほんとうに剛さん、私や、貴郎に感謝してますよ、貴郎の様な男らしい男を弟と呼ばせ給ふ神様は、何と云ふ恩恵深くて居らつしやるでせう、私の嬉しく思ふのは、天では神様、そして地では、剛さん、貴郎ばかりです——」

彼女は忽ち眼を閉ぢて俯けり「——左様じや無い、——私は儘に身も心も献げた尊き丈夫が在るのです、けれど篠田さん——貴方は少しも私の心、此の涙に浸せる我心を少しも知つては下さりません——其れを御怨み申しは致しません、けれど何と云ふ情ない世の中でせう、此の純潔な私の戀が——左様です、純潔です、必ず一點の汚漬もありません——貴方の爲めに禍の種となるのです、——篠田さん、我が夫、何卒御赦し下さいまし、貴方の博大の御心には泣いて居るのです、私は既う決心致しました、私は父から全く離れました、家庭からも全く離れました、教會からも離れました、私は天の神様をのみ父とし母として、地に散在する憐れなる兄弟と、大きな家庭を作る

ことに覺悟致しました、そして此世を神様の教會と致します、——篠田さん、貴郎は私の此の決心を、叱つて下たさいませんでせうねエ——」

彼女は恍惚として夢の如く、心に浮ぶ篠田の面影に縋りて接吻せり、

「姉さん」と黄色の聲して芳子は走せつゝ入り來れり、

梅子は遽然我に返へりつ、「あら、芳ちゃん、喫驚しましたよ、何なすつて」

「姉さん、私、可いこと聞いたワ」芳子は姉の面打ち眺めて笑ふ、

梅子は又た何か面白ろからぬ我が噂なるべしと思へば、取り合はん心もあらず、

去れど芳子は一向無頓着に、大勝利を報告する將軍の如くぞ勇める「姉さん、私、今

ま可いこと聞いてよ、篠田さんは到頭縛られて、牢屋へ行きなざるんですと」、

巨砲もて打たれたらん如き驚愕を、梅子は熟と制しつ、「——左様ですか——誰にお聴

きなすつて——」

「今子、何處からか電話で、——何でも警視廳とか云つてましたの——報した來た

んです、阿父が阿母に話して在らしつてよ、是れで漸く松島さんへ、お詫が出来ると、ほんとに左様だわねエ」

「へエ、そして芳ちゃん、既う牢屋へ行らしたのですか」

「否え、明日ですつて、」

「左様ですか——」

梅子は強て平然と装へり、去れど制すべからざるは其顔なり、看よ、其の凄き蒼白を、

芳子は稍々豫算狂へるが如く、訝かしげに姉の面見つめて、居たりしが、芳子々々と、

ケタ、ましく呼ぶ母の聲に、飛ぶが如くに黙つて走せ行けり、

梅子は聲を呑んで瞳と伏せり、

二十九の一

宵の雨も何時しか雪と降り替はれり、

麻布本村町の篠田が玄關には、深け行く寒き夜を、大和一郎の尙ほ兀々と勉學に餘念

なし、
 雪バラ／＼と窓を打ちて、吹き入る風に身を慄はしつ『ヲ、寒い、最早何時かな、未だ十二時にはなるまい』
 顧る臺所の方には、兼吉の老母が轉輾反側の氣はい聞ゆ、彼女も此の雪の夜の物思ひに、既に枕に就きたるも、容易くは夢の得も結ばれぬなるべし、
 篠田が書齋の奥よりは、洋紙を走しるペンの音、深夜の寂寞を破りて漏れ來ぬ、
 大和は襟掻き合はしつ『ア、先生は未だお寝みにならんのか、何か書いて居らつしやる様だ、——明日の社説かな、否や、日常お寝の時間に仕事なさるのだから、他に何か急用の書き物があつたらぬのであろう、手紙かな、平民週報の寄書かな、ア、左様だ、露西亞の社會民主黨へ贈りなされる文章に相違無い——兩國の侵略主義者が嫉妬猜忌して兵火に訴へようとする場合に、我々同志者は相應じて世界進歩の爲めに、平和の福音を鼓吹せねばならぬと言ふて居られたから——が、先生も實にお氣の毒で堪

らぬ』
 大和は瞑目して大息せり、
 『教會を除名されなすつたなどは、別段先生の損失でもなく、寧ろ教會の愚劣と偽善を表白したに過ぎないのだが、驚いたのは鍛工組合の舉動だ——先生が梅子さんと結婚なさる爲めに、主義を抛棄なさるとは、何と云ふ破廉耻な言ひ草だ、嫉妬深い松本の暴論も、老實な浦和の主張で未だ決議には至らぬさうだが、其れが彼の吾妻の奸策だとは何事だ、尤も彼奴、嫌な奴サ、先生の前ではヒョコ／＼頭ばかり下げて諂諛ばかり並べて、——誰か何時やら、政府の狗じや無いかと注意したつげが、何も先生は既に左様と知つて居られるらしかつたよ、彼時の御返事を見ると——彼程敏慧な頭腦を邪路から救ひ出して遣るものが無ければ、當に一人の兄弟を失ふのみならず社會は何程毀損されるかも知れないと、——先生を殺すものは、必竟先生の愛心だ——ア、』

薬園阪下り行く空腕車の音あわれに聞こゆ「ウム、車夫も嘸ぞ寒むからう、僕は家に居るのだけれど」大和は机の上に両手を組みつ、頭を俯して又た更に思案に沈む

「本當に左様だ、先生を殺すものは先生の愛心だ、花ちゃんを救ふ、すると直ぐ其れが先生に禍するのだ、其れに梅子さん——何も不思議だ、何故社會は虚誕を傳へて喜ぶのだらう、が、烟の立つ所必ず火ありとも云ふぞ、——然かし僕が若し婦人ならば矢張り左様思ふかも知れない、僕が先生を斯く思ふの情、是れが女性の心に宿れば戀となるのかナ——ア、何卒先生に思ふ存分、腕を伸ばさして上げたいナ」

風又た吹き加はりぬ、雪の音はげし、門戸に低く人の聲す、大和は耳を聳てぬ、戸を叩く音なり、何人の何等緊急事ならん、此の寒き雪の深夜に——大和は訝かりつゝ立つて戸を開きぬ、

吹き巻く雪中、門燈を背にして、黒き影一個立てり、

二十九の二

「何殿です」と大和が雪明にすかして問ふを、門前の客は袖の雪拂ひも敢へず、ヒラリとばかり飛び込めり、

東コートに御高祖頭巾、——ア、是れ婦人なり、

大和は眼を圓くして怪しげに見つめぬ、

「大和さん、婦人の聲に、大和は愕然として一步退けり「ア、貴嬢ですか」

「あの、御在宅でいらつしやいますか——是非御面會せねばならぬことが御座いますので」

深夜の雪道に凍へてや、婦人の聲の打ち震ひて聞へぬ、

「暫くお待ちを願います」と大和は急ぎ篠田の書齋へと走せぬ、

「先生——」驚愕と怪訝とに心騒げる大和の聲は甚くも調子狂ひたり、

既に文書認め了りし篠田は、今や聖書繕きて、就寝前の祈禱を捧げんとしつゝありしなり、

彼は静かに顧みぬ『大和君、何です』

『只今、あの、山木の梅子さんが御光来になりました』

『ナニ、梅子さんが——』篠田も首傾けぬ『お一人でか』

『左様です、何か至急の御要件だそう御座います、是非御面會をと云ふことです』

『ウム此の雪中を御光来は尋常のことでは有るまい、——早速に』

梅子は大和に導かれて篠田の室に入り来りぬ、肉や、落ちて色さへ甚く衰へて見ゆ、彼女は言葉は無くて只だ慇懃に頭を下げぬ

『良久御目に掛りませぬでした』と、篠田も丁重に禮を返へして『此の吹雪の深夜御光来下ださるとは甚だ心懸に存じます、早速承るで御座いませう』

梅子は僅に頭を擡げぬ『篠田さん——私、貴所に御逢ひ致しまする面目が無いので御座いますけれど——今晚容易ならぬことを、耳に致しましたものですから——』

彼女は逡巡ひつゝ、窃と傍の大和を見やりぬ、容易ならぬことの一語に、危殆の念愈々高まれる大和は、躊躇する梅子の様子に、必定何等の秘密あらんと覺りつゝ、篠田を一瞥して起たんとす、

篠田は制しぬ『何事か知りませぬが、梅子さん、少しも御懸念に及びませぬ、是れは私の弟ですから——』

大和は又た座りてホと吐息を漏らしぬ、

『否エ、篠田さん、大和さんに御遠慮申したのでは御座いませぬが、梅子は言はん』

と欲して言ひ能はざるものゝ如し、

『何でありまするか』と篠田は問ひぬ『何か私の一身に關係しました凶事でも御聞き込みになりましたので——』

「ハイ」と、僅に梅子は首肯さぬ、

大和は拳を固めぬ、

「如何なる件でありますか、御遠慮なく仰つしやつて下たさい」篠田は火箸もて灰かきならしつゝ、あり、

「篠田さん」と、梅子は涙呑み込みつ「是れは貴郎の少しも御關係ないことです、けれど今の世の中は、貴郎を——拘引する奸策を廻らして居るのです、冷かな手は黒さ繩もて貴郎の背後に迫つて居りますよ——」

梅子は涙輝く眸を揚げて、始めて篠田を凝視せり、

「やッ」と、思はず聲を放つて、大和は膝を進めぬ、

「は、ア——イヤ左様したこともありません」と篠田は聊か怪しむ色さへに見へず、雨戸打つ雪の音又た劇し、

堪へずやありけん、大和は口を開きぬ「先生——御心當りがお有りなさるのですか」

「否や、別に心當も無いが、災厄と云ふものは、皆な意外の所より来るのだから」

大和は復た沈黙せしが、やがて梅子の方に膝を向けぬ「山木様、何時、先生を拘引すると申すのです」

「明朝——」

「明朝——」とばかり大和は殆ど色を失ひしが「そして、何れから御聴き込みになつたので御座います——甚だ差出がましう御座いますか——」

梅子は悄然頭を垂れぬ

「——何ぞ、篠田さん、御赦下下さいまし——警視廳から愚父へ内密の報知がありましたのを、圖らず耳にしたので御座います、お耻しいことで御座いますが、愚父などからも内々警察へ依頼致したのに、相違無いので御座います——篠田さん、私は貴所の前に一切を懺悔致さねばならぬことが御座いますので、御輕蔑をも願みず罷り出でましたので御座いますか——」

壘に兩手支きたるまゝ、聲は震へて口籠りぬ、大和は窓と立ちて室を出でぬ、不安の胸に腕拱きつゝ、

「梅子さん、決して御心配なさるには及びませぬ」と、篠田は微笑せり「我々の頭上には絶へず政府の警戒が厳酷なので、何時何事の破裂するか、豫測することが出来ないので、是れは日本ばかりではありませぬ、萬國に散在する私共の同志者は、皆な同一の境遇に在るのです——ですから、貴嬢に謝罪して頂くと云ふ様な必要は無いと思ひます」

良久して彼女は思ひ切て口を開きぬ——貴所の御同志が政府の憎悪を受けて居なさいますことは、兼々承知致して居りますが、貴所の御一身にのみ、不意の御災難が降り懸かると云ふのは、其處に特別の原因がありません——そして其の機會を生み出しましたのは——私の——心の弱いからで御座います」

「——何と、篠田さん、御詫致して可いのか」と、はふり落つる涙を梅子は拭ひつ

「心亂れて我ながら言葉も御座いませぬ——只だ一言懺悔させて下ださいますか」
「喜で御聽申すで御座いませう」

「何卒、篠田さん、御赦し下さいまし——貴所の、御災難の原因はと申せば、——私が貴所を御慕ひ申したからで御座います——」梅子は壘に伏せり、歎歎の音、時に微に聞ゆ、

梅子は面を擡げぬ——「定めて厚顔ものと御蔑みも御座いませうが、篠田さん、私如きものが、貴所を御慕ひ申すと言ふことが、貴所の御高德を毀けることになりまするのには能く存して居りますから、只だ心の底の秘密として、曾て一語半句も洩らした覺のありませぬことは、神様が御承知下さいませぬ——其れを、結婚の申込を悉く謝絶致します所から、人を疑つて喜ぶ世間は種々の風評を立てまして——貴所の御名譽に關係致します様な記事を、數々新聞の上などでも讀みませする毎に、何程

自分で自分を叱り、陰ながら貴所に御詫致したで御座いませう——けれど我が心に尋て見ますれば、他の傳説を、全く虚妄とのみ言ひ消すことが出来ませぬので、必竟、貴所に此の最後の——縲紲の耻辱を御懸け申すのも、私の弱き心からで御座います」梅子は袖を噛み締めて聲立てじと唳へぬ、

「何も仰しやつて下ださいませう」と篠田は目を閉ぢつ「現社會の基礎に斧を置きつゝある私共が、其の反撃に逢ふのは、毫も怪むに足らぬことで御座います」

「けれど、篠田さん、貴所は今更御自愛なさらねばならぬ御體で御座いませう」梅子の一語には満身の力溢れて聞こへぬ、

「自愛致すとは」と、篠田は訝る、

「此儘篠田さん」と梅子は却て怪みつ「貴所は入獄なさるので御座いますか、」

「左様です、力を以て來るものには、只だ温順を以て應接する外無いでせう」

「けれど——從來、愚父などの話に依りますれば、貴所のような方は、監獄内で不

測の災禍にお罹りなさる恐があると申すては御座いませんか、出過ぎたことでは御座います、暫く日本を遠のきなさいましては——外國には随分他國に身を逃れると云ふ例もあるよう御座いますから」

「梅子さん、御厚誼は謝する所を知りません、けれど私の一身には一人探偵が附けてあるのです、取分け既に拘引と確定しましたからは、今更お話致し居ります私の一言一句をさへ、戸の外に筆記して居るものがあるも知れないです、——若し私己の野心から申すならば、今更空しく牢獄に囚はれて、特に只今御話の如き暴行は、随分各國の獄裡に實驗せられた所ですから、私も決して喜んで行かうとは思ひませぬ乍併、私共同志者の純白の心事が、斯かることの爲に、政府にも國民にも社會一般に説明せられまするならば、眇たる此一身に取て此上なき榮譽と思ひます、實は我々の同志者と言はれて居る間にさへ、尙ほ心術を誤解して居るものが尠くないので御座いますから——」

篠田は語り來つて、急に言葉を更め「餘り自身のことを語り過ぎましたが、其よりも貴嬢の將來こそ問題でせう、實は先頃剛一君とも一寸御話致したことでありましたが」

梅子の面は眞紅を染めぬ、「有難う御座います、貴所の温和の御精神をお聴致すに就け何と云ふ私の恐ろしい心で御座いませう、——私は篠田さん、ほんとうに懺悔致しました、そして決心致したので御座います、私は兼ねて愚父から多少の地所と財産とを譲り受けて居りますので、所詮不義の結果の財産のですから、一には贖罪の爲め、此の身と併せて貧民教育に貢献したいと考へて居たので御座いますが、今度愈々着手致すことに決心しまして御座います、申す迄もなく、只だ貴所の御指揮をと其れのみ心頼で御座いましたものを、——」

「ア、其れで安心致しました」と、篠田は晴々と微笑を洩せり「梅子さん、誠に良き御計畫で御座います、若し私が自由の身で在りませうならば、充分御協議致しまして聊か理想を實行して見たいのであります、然かし決して御心配なさいませぬ、社

會主義倶楽部の諸君は、無論滿腔の尊敬と同情とを以て、貴嬢の御事業を贊助致しませう」

篠田の面は輝き來れり「梅子さん、教會の爲の宗教は未練なくお棄てなさい、原因を治めない慈善事業は偽善者に御一任なさい、富の集中、富の不平均、是れが單一なる物質的問題とは何事です、富資が年々増殖して貧民が歳々増加する、是れ程重大なる不道德の現象がありますか、御覽なさい、今日の生活の原則は一に掠奪です、個人は個人を掠奪して居る、國は國を掠奪して居る、刑法が言ふ所の窃盜、彼は兇賊です、神の見給ふ窃盜とは則ち、今日の社會が尤も尊敬して居る法律と愛國心です、所有權の神聖兵役の義務、是れ皆な窃盜掠奪の符調に過ぎないのです、而かも是れが爲めに尤も惱んで居るものは、梅子さん、實に女性でありますよ、社會主義とは何ですか、一言に掩へば神の御心です、基督が道破し給へる神の御心です、」

彼は机上の一冊を右手に捧げつ「何卒、梅子さん、吳々も是の御研究をお忘れな

とを望みます、人生の奥義は此の些かなる新約書の中に溢れて、汲めども盡くることが無いであります、——ア、梅子さん、何卒我國に於ける、社會主義の母となつて下さい、母となつて下さい、是れが篠田長二畢生の御願であります』

梅子は涙堰さも敢へず、隣房の時計、二ツ鳴りぬ、ア、

『最早、二時』と、梅子は頭を垂れぬ、警吏の向ふべき日は、既に二時を經過せるなり、曙光差し来るの時は、則ち篠田が暗黒の底に投せらるべきの時なり、三年の煩悶を此の一夜に打ち明かして、柔しく嬉しく勇ましさ丈夫の心をも聴くことを得たる今は、又た何をか思ひ残さん、いざ、立ち歸りなんか、——歸りとも無し、胸も張り裂けんばかりの新しさ苦惱を集中して、梅子は凝乎と篠田を仰ぎ見ぬ、兩個相見ても言葉なし、

良久くして、熱涙玉をなして梅子の頬を下りぬ、彼女は唇を噛んで俯さぬ、

突如、温き手は來つて梅子の右掌を緊と握れり、彼女は總身の熱血、一時に沸騰すると覺へて、恐ろしさまでに戦慄せり、額を上ぐれば、篠田の兩眼は日の如く輝きて直ぐ前に懸れり、

篠田は一倍の力を加へつ『梅子さん——此れは未だ會て一點の汚れも見ざる純潔の心です、今ま始めて貴嬢の手に捧げます』

梅子は左手を加へて篠田の右手を抱きつ、一語も無くて身を其上に投げぬ、風も寝ね雪も眠りて夜は只だ森々たり、

既にして梅子は涙の顔を擡げぬ『篠田さんお叱りを受けますかは存じませぬが、暫時御身を潜めて下ださることはかないませぬか、——別段御耻辱と申すことでも御座いませんでせう——犬に眞珠をお投げなさらずとも——』

篠田は首打ち掉りつ『如何なる場合に身を棄つべきかは、我等が淺慮の判別し得る所ではありませんぬ』

『篠田さん、最早決して弱き心は持ちませぬ』と梅子も今は心決めつ『何時と云ふ限も御座いませぬから、是れでお別れ致します、只今の御一言を私の生命に致しまして——で、御一身上、私が承つて置きまして宜しいことが御座いまするならば、何卒仰しやつて下下さいませんか——』

篠田は暫ばし首傾けつ『では、梅子さん、一人御紹介致しますから』と、彼は大和を呼んで兼吉の老母を招きぬ、

聲を呑んで泣き居たる兼吉の老母は、涙の顔を揚げも得ずして打ち伏しぬ、

『梅子さん、此の老女を勞つて下さい、是れは先頃藝妓殺と唄はれた、兼吉と云ふ私の友達の實母です、——老母、私は、或は明日から他行するも知れないが、少しも心置なく此の令嬢に御信頼なさい、兼吉君は無論無罪になるのであるから、少しも心配なく、其れに若し兩個が相許るすならば、花ちゃんとは結婚したらばと思つて居るのです、元より強ゆることは出来ませんが』

篠田は梅子を顧みつ『只今慈愛館に居りまするが、花と云ふ婦人が在るのです、元と藝妓でありまするが、餘程精神の強固なのですから、將來貴嬢の御事業の御手助となるも知れませぬ、』

梅子は思はず赧然として愧ぢぬ、彼女の良心は私語り、汝曾て其の婦人の爲めに心に嫉妬てう經驗を嘗めしに非ずやと、

兼吉の老母は正體なき迄に咽び泣きつ、

『其から梅子さん、私一身上の御依頼が御座いまするが』と、篠田は悄然として眼を閉ぢぬ、

『私に一人の伯母があるのです、世を厭ふて秩父の山奥に孤獨して居ります、今年既に七十を越して、尙ほ鏗鏘としては居りますが、一朝私の奇禍を傳へ聞ませうならば——』語斷へて涙滴々

梅子は耐へず膝に絶れり、『御安心下さいまし——、何卒御安心下さいまし——』

篠田は梅子の肩、両手に抱きて『心弱きものと御笑い下ださいますな——ア、今こそ此心晴れ渡りて、一點憂愁の浮雲をも認めませぬ、然らば梅子さん、是れでお訣別致します、』

『——心は永久に同住で御座います』
『勿論』

空は何時しか晴れぬ、陰曆の何日なるらん半は缺けたる月、楓の巨木、花咲きたらん如き白き梢に懸りて、顧み勝ちに行く梅子の影を積れる雪の上に見せぬ、

三十

窓白く雪の夜は明けんとす、

篠田は例の如く早く起き出で、一大象牙盤とも見るべき後圃の雪、いと惜しげに下駄を印しつゝ、逍遙す、日の光は尙ほ遙か地平線下に憩ひぬれど、夜の神が漉し成せる

清新の空気が、静かに來り觸れて、我が呼吸を促がす、目を放せば高輪三田の高臺より芝山内の森に至るまで、見ゆる限りは白妙の帷帳の下に、混然として夢尙ほ圓なるもの、如し

篠田の双眸は不圖、圓山の高塔に注がれて離れざるなり、静穩なる哉、芝の杜よ、幽雅なる哉、圓山の塔よ、去れど其の直下、得も寢で悲み、夜を徹して祈れるもの一人あり、美しき雪よ、彼女の目より涙を拭へ、清しき風よ、彼女の胸より愁を拂へ——ア、我が梅子、汝の爲めに祈りつゝある我が愛は、汝が心の鼓膜に響かざる乎、——父なる神、永遠に彼を顧み給へ、彼女に聖力を注ぎて、爾の聖旨を地に成さしめ給へ、篠田は歩を轉じて表の方に出でぬ、

雪を蹴つて來るものあり『先生——お早う御座います』言いつゝ彼は、一葉の新聞を篠田の手に捧ぐ、

『ア、村井君ですか、御困難ですネ』と、篠田は新聞受け取りつゝ、『何か昨夜あ

つたと見えませす子、少し遅れた様ですが」

「ハ、夜中に長い電報が参りましたので、印刷が大層遅くなりました——先生、到頭戦争を爲るのでせうか——」

「サア、左様なりませう子」

「何卒、先生、主義の爲めに御奮闘を願います」慇懃に腰を屈めたる少年村井は、小脇の革囊緊と抱へて、又た新雪踏んで駆け行けり

中學の校帽凜々しく戴ける後姿見送りたる篠田は、やがて眸子を昨日己が造れる新紙の上に懐かしげに轉して『労働者の位地と責任』と題せる論文にとわたり目を走らせつ、心は今しも村井が告げたる二面の夜中電報に急げり

「日露外交の断絶」テフ一項の記事と相並で、篠田の眼を射りたるものは、『九州炭山坑夫同盟の破壊』と題せる二號活字の長文電報なり、篠田の心は先づ激動せり、

……憲兵巡查の強迫は正面より來り、黄金の魔術は裏面より行はれたり……

首領株三十名今夕突然捕縛せられたり、憲兵巡查の亂暴甚しく、負傷者少からず其の多くは婦人小兒なり……是れ買収政略の到底効果なきより來れるものと知らる……維持費盡く、

『首領の捕縛』『公權の亂暴』『婦女少兒の負傷』而して噫、『維持費盡く』

新聞右手に握り締めたるまゝ、篠田は切齒して天の一方を睨みぬ

白雪一塊、突如高き槻の梢より落下して、篠田の肩を健か打てり、

午前七時半、警官來れり

今や篠田の身は只だ一片の拘引状と交換せられんとすなり、大和は其の胸に取り付き、鏡の如き涙の眼に、我師の面を仰ぎぬ、

篠田は徐ろに其背を撫しつ『君、忘れたのか——一粒の麥種地に落ちて死なずば、如何で多くの麥生い出でん——沙漠の旅路にも、晝は雲の柱となり、夜は火の柱と現はれて、絶えず導き玉ふ大能の聖手がある、勇み進め、何を泣くのだ』

火の柱

火の柱 終

轍の迹のみ雪に残して、樞車は遂に彼を封して去れり、

三

明治三十七年五月十日印刷
明治三十七年五月十日發行

定價金參拾五錢

著作兼發行人 木下尙江
東京市麻布區廣尾町三十五番地

印刷人 石川三四郎
東京府豊多摩郡澁橋町字角筈七百卅八番地

印刷所 株式會社 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地

不許複製

發行所

東京麹町區有樂町三丁目一番地

平民社

平民文庫出版豫告

消費組合の話

五月中旬發行

石川旭山著

▲此頃社會の諸方面に勃興しつつある消費組合(一名購買組合)につき、其歴史、其理論、其組織、其實例などを平易通俗に説明記述せり、必ず世の需要に應ずる者ゆるを信ず

上の瑞西

五月中旬發行

安部磯雄著

▲日露戦争正に酣なるの時、平和と幸福とを世界に宣傳すべき天職を帯びたる此中立國の國情が此の温厚の紳士に依りて世に紹介せらるゝは吾人の深く愉快とする所也

發行所

東京市麹町區
有樂町三丁目

平民社

週刊平民新聞

毎週
日曜
發行

東西兩洋に横流せる社會主義の思潮に接せんと欲する者は
本紙に來れ

西洋に於ける社會運動の形勢と日本に於ける社會問題の生
起とを知らんと欲する者は本紙に來れ

本紙は日本社會主義唯一の機關新聞也

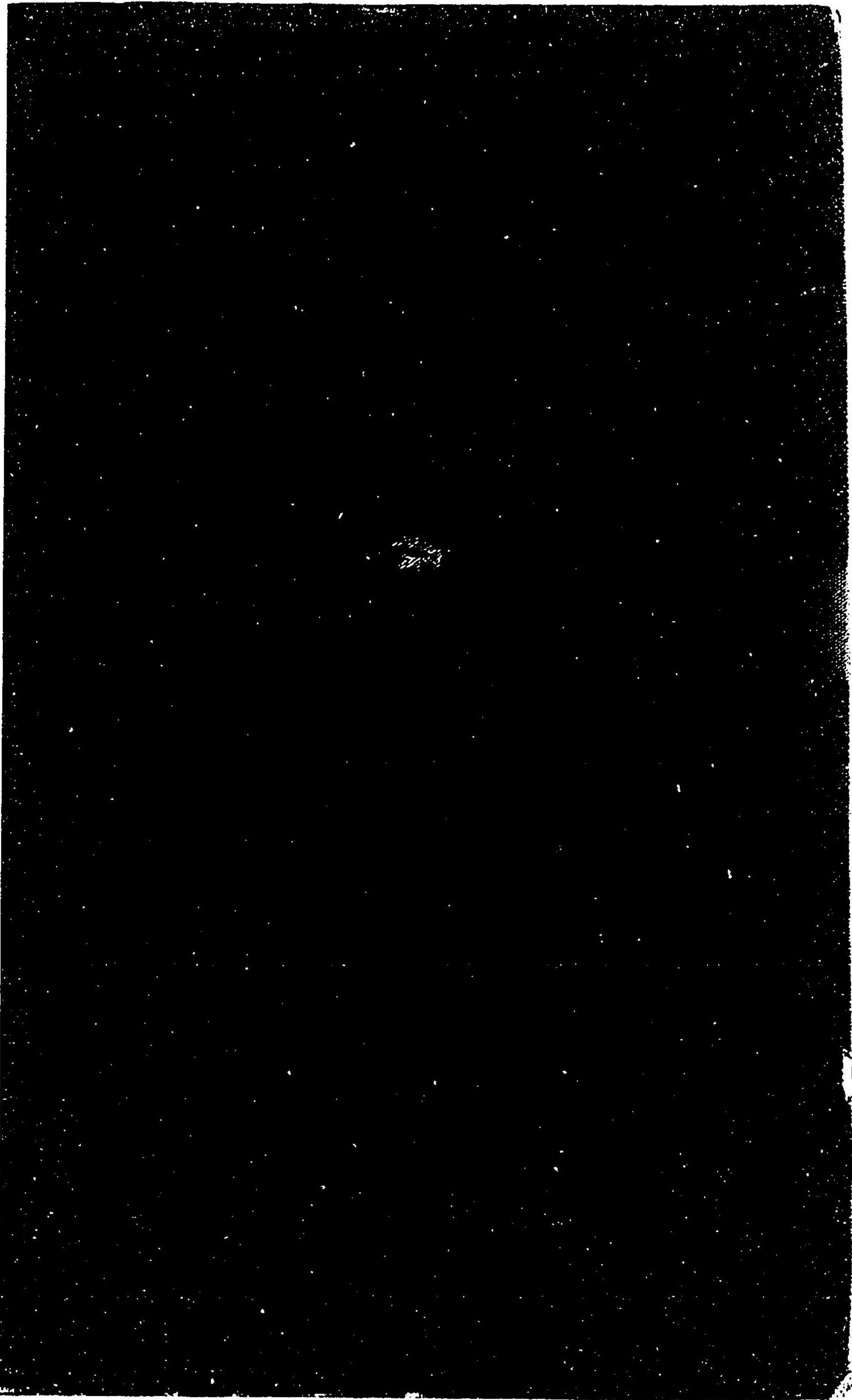
定價〔一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十
部前金一圓十六錢、總て郵税を要せず〕

發行所

東京市麴町區
有樂町三丁目

平民社

79
315



095132-000-1

79-308

火の柱

木下 尚江/著

M37

DBQ-2754



